

逗子市文化財調査報告書

第 四 集

小 坪 ・ 新 宿

逗子市教育委員会

逗子市文化財調査報告書

第 四 集

小 坪 ・ 新 宿

逗子市教育委員会



懷古——海岸より往古城址の遠望

(現在は埋立のため、この写真の面影はまったく失われてしまった。)



径 68 mm
高さ 7.5 mm
重さ 74 g

小松流水文双雀鏡（逗子市小坪大塚出土）



径 58 mm
高さ 4.5 mm
重さ 34 g

小松散文双雀鏡（同上）

目 次

刊行にあたって..... 小川重太郎	1
小坪・新宿の歴史.....	4
逗子の古建築.....	7
正 覚 寺.....	8
海 前 寺.....	9
小 坪 寺.....	9
伊勢町八幡宮.....	10
金 剛 寺.....	10
池子神明社.....	11
寺史と彫刻・絵画.....	16
正覚寺の寺史.....	17
正覚寺の彫刻.....	19
海前寺の寺史.....	23
海前寺の彫刻と絵画.....	24
小坪寺の寺史.....	29
小坪寺の彫刻.....	31
仏乗院の寺史.....	36
仏乗院の彫刻.....	36
高養寺の寺史.....	42
高養寺の彫刻.....	42
古 文 書.....	45
正覚寺文書.....	46
海前寺文書.....	55
小坪寺文書.....	62
仏乗院文書.....	71
考 古.....	72
おわりのことば.....	148

刊 行 に あ た っ て

逗子市教育委員会教育長

小 川 重 太 郎

このたび逗子市文化財調査報告書が回を重ねて、第四集が刊行されるはこびになりましたことは、まことに欣快にたえません。

昭和25年の文化財保護法が制定されることによって保護対策が推進されてから、すでに20数年経過しました。その間、調査ならびに結果の報告が各地で行なわれ、日本全土の保護体制が次第に確立の方向に向かいつつあり、また、一般国民の理解と協力も一層高まりつつあることは、よろこばしいことです。

しかしながら一面産業経済の進展と、社会構造の変化に伴い、貴重な文化財の保護は容易なこととはいえないようになってきていることも否めない事実であります。即ち現代に生きるものの近代化の名に求める新しい価値と、古き時代を実証する貴重なものへの価値とが相剋する中での保護活動は、並大抵のことではありません。これを遂行することは、先ず個々の文化財の解明であってこれには専門家の学術的見解をあおぎ、その結果を得ることでなければなりません。また解明されたものは広く市民に理解していただくことが、文化財保護体制の基盤でありましょう。

第四集は、小坪・新宿地区の主要な文化財、ならびに市内の埋蔵文化財について、学術的な調査結果をまとめたものであります。

この報告書が、広く文化財に関心をもつ方々の、お役に立つことを願うとともに、文化財保護へのご理解を得ることを期待するものであります。おわりに調査ならびに執筆に協力賜った関係各位に深甚の感謝をささげて刊行のことばといたします。

小 坪 ・ 新 宿 の 歴 史

貫 達 人

小坪・新宿の歴史.....	4
---------------	---

小坪・新宿の歴史

小坪は逗子市の西方にあって鎌倉市と境を接し、北東は久木・新宿に隣接する方1.53平方キロメートルの字。昭和3年刊行の『逗子町誌』によると、小坪は東西に分れ、東小坪は新宿・披露を、単に小坪と呼ぶ場合は西小坪を指すという。その西小坪の字は、谷戸・中里・伊勢町・南町・西町・飯島であると記す。古来、鷺ヶ浦（小坪浜）をかかえたのどかな山間の漁村である。なお、新宿の歴史はたどれないが、現在のように字名が正式に定められたのは昭和18年4月1日のことである。

この地域は太古から人間が生活を営んだようで、小坪披露台地から縄文早期の土器が発掘されている。また、台地の下方には古墳時代後期以降の横穴古墳群もある。

小坪の地名が初めて記録にみえるのは、『吾妻鏡』『平家物語』などで、小坪・小壺・小窪という字があてられている。地名の由来は不明だが、頼朝が三浦遊覧のさい、土地の人から献上された茶壺を喜んで披露したので、これより坂を披露坂、村名も小坪と定められたという（三浦古尋録）。一説には小局の截尾語で、朝廷をはばかってツボネをツボと呼んだともいわれる（逗子町誌）。

治承年4（1180）頼朝が伊豆で挙兵したおり、支援に向おうとした和田義盛一党と、阻止しようとした畠山重忠とが、この小坪浜で合戦した。ついで、頼朝の寵女亀前が小坪（小坪とあり）の小中太光家宅にかくまわれていたり、頼朝、頼家が小坪浜で遊宴を催したという記事もある。元仁元年（1224）および嘉禎元年（1235）に行なわれた鎌倉四角四境祭（流行した悪疫を対治するため鎌倉の四境で催された鬼気祭）での当地は、南の界であった。が、この後鎌倉時代を通じて小坪にまつわる記録は見あたらない。康安2年（1361）の鎌倉黄梅院蔵『小坪郷分帳』によると、小坪は鎌倉郡に属し、しかも、小坪領の半分が黄梅院領となっていたことが知れる。のち、某年（永徳頃か）5月、饗庭氏直が足利尊氏追善のためとして小坪郷を寄進したさい、將軍義光は鎌倉御所氏満に書を与えて、小坪郷一円を黄梅院へ渡付せしめるよう求めている（黄梅院文書）。

明応3年（1494）三浦義同が父時高をほろぼして三浦半島を支配すると、北条早雲が築いた住吉城を攻め陥し、弟道香に守らせた。しかし、永正9年（1512）早雲に攻められて落城、義同らは新井城に退く。そして三浦一族が滅亡したのち、三浦半島は小田原北条氏の支配下に入る。『小田原衆所領役帳』には次の記載がある。

一 石上 弥次郎

七拾八貫六百廿六文

式拾貳貫文

以 上

三浦 小坪

御蔵山 此内五貫文引銭

この頃、小坪は鎌倉郡から離れ三浦郡に属していたことが知れる。

徳川家康が関東を支配すると、三浦半島は天領となった。小坪村の検地は、中島大蔵盛直が文禄3年（1594）9月7日から14日まで行なっている。牛尾家に伝わる同年の『水帳』（逗子市誌第五輯）によると、小坪屋敷36軒、浦屋敷22軒、計58軒を数えることができる。なお、この頃の小坪の範囲は、田越

浦（逗子海岸付近一帯）まで含まれていたようで、さきの『水帳』には「新宿」「新宿川流」などという地名がみえる。この田越浦について小坪村と逗子村とが、支配圏をめぐる境界を争ったのは寛文元年（1661）と元禄12年（1696）のときでありその決着は元禄14年のことである。その間の村の動きを逗子市誌第五輯巻末に収める小坪村年史から拾ってみると一。

○延宝8年（1680）7月、須賀村五良右衛門船小坪浦に漂着する。

○元禄3年（1690）浜新屋敷の御改あり、420坪が加えられる。

○元禄4年（1691）新肴場溜金につき、武州相相引ヶ浦と肴問屋との間に悶着がおこった。

○元禄7年（1694）7月17日大風が吹き、伊豆戸田村、沼津、清水港の舟等が難破し、小坪浜は水死人、船具、舟荷物が散乱した。

○元禄11年（1698）逗子村は酒井雅楽頭知行所となり、田越浦の所属について問題となった。

○元禄12年（1699）逗子村、小坪村の若い衆300人近くが田越浦で乱闘、責任者は江戸へ護送された。

○元禄13年（1700）江戸で田越浦について裁判が続けられた。

新肴場肴荷送りの村々が肴荷送りの拒否の運動をおこしたが成功しなかった。

○元禄14年（1701）田越浦は小坪領と判決があった。但し逗子村は草銭を出し入会を認められた。裁判の費用150両は、岡50軒、浜200軒で半々に負担した。

ともあれ、小坪に残る記録のうち、漁業に関する史料が元禄頃から特に多くなっているのをみても、村の漁業は元禄年間から本格的活動に入り、漁村としての形態をととのえたと思われる。享保19年（1734）の『小坪村^{浜岡}惣百姓家数^{五人組}覚^帳』が当時の小坪を、岡分60軒、浜分254軒、他に寺6ヵ寺、店3ヵ所、総数323軒と伝えるのをみるにつけ、文禄の頃とは比較にならず、ことに浜分の軒数が大幅に増加しているのは、小坪が漁村として定着したことを示している。しかし、村は土地が狭少であることや、漁業といっても漁舟が丸木舟などによる零細な沿岸漁業にとどまっていたらしく、江戸時代を通じて貧困の村であったといえそうである。そのせいか、その後の村の戸数も殆んど変わりなく、文化9年（1812）で350余戸が記録されている（三浦古尋録）。

小坪を経済的にさらに苦しめたのは、天領の貢租のほか「三崎往還・浦賀往還の岐れ道として両往還への御伝馬御用、鎌倉八幡宮御役、日光例幣使御用、朝鮮人来朝による馬入川船橋役等があり、殊に沿岸警備御用及び本街道加助の急増した幕末には、御役過多とそのためにかさむ借金」であったという（逗子市誌第五輯、小坪について）。

小坪村が天領から離れ久世隠岐守広管の領地となったのは天明4年（1784）である。以来、松平肥後守容衆（文化8年）・松平大和守矩典（文政4年）・井伊掃部頭直弼（嘉永元年）・松平大膳大夫（嘉永7年）・細川越中守（安6政年）の各預所となったが、慶応3年（1867）再び天領に復している。

明治維新のおり、三浦郡は神奈川県に編入されたが、のち間もなく神奈川県となった。明治5年の行政改革では、小坪村は隣村8ヵ村と共に7区のうち第3区に属し、区長は高橋五右衛門。また、その頃の家数は335軒と減り、船数は187艘であった。いずれにせよ、明治から昭和初年にかけて、田越橋の掛替（明治9年）をはじめ、久木関場から小坪新宿への道路修理（明治36年）や西谷戸から鎌倉への造道

(大正2年)、久木・小坪間の切通し開通(昭和2年)、披露山登山道の開通(昭和11年)など、山あいの漁村小坪の発展を期すかのように事業が行なわれたが、僻地的な性格をもつ小坪は、文化の谷間の状態が続いた。しかし、最近では海岸が埋立られたり、多くの住宅が建てられたりして、京浜地方の住宅地として面目を新たにしつつある。昭和25年10月調べの人口は3,655人(逗子市誌第1輯)、現在の人口は7,090人である。ちなみに現在の新宿の面積は0.79平方キロメートル、人口は2,720人。

逗子の古建築3

(小坪・桜山・池子地区)

関 口 欣 也

1. 正覚寺本堂（浄土宗）	8
2. 海前寺庫裡（時 宗）	9
3. 小坪寺本堂（浄土宗）	9
4. 伊勢町八幡宮本殿および覆屋	10
5. 金剛寺本堂（真言宗）	10
6. 池子神明社神輿	11

逗子の古建築3

(小坪・桜山・池子地区)

昭和47年9月22日および23日の両日、小坪・桜山地区の近世建造物の調査を実施した。
調査した社寺は正覚寺・海前寺・小坪寺・仏乗院・小坪神明社・伊勢町八幡宮・須賀神社・新宿稻荷社・
・亀岡八幡宮・延命寺・金剛寺・宗泰寺・高養寺の11社寺である。このうち、近世建築の主なものはつぎの通りである。

正覚寺：本堂

海前寺：庫裡

小坪寺：本堂内部

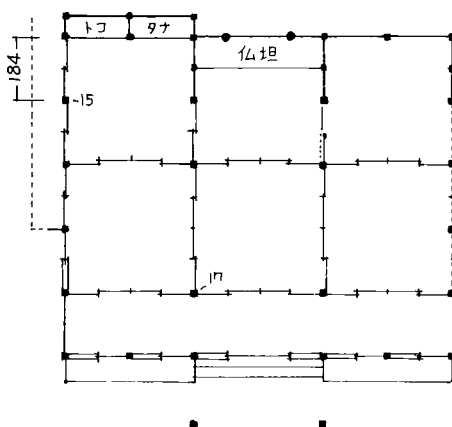
伊勢町八幡宮：本殿

金剛寺：本堂

このほか、昨年度調査の機会がなかった池子神明社神輿が本年度調査できたので、あわせて報告することとする。

1. 正覚寺本堂（浄土宗）

『新編相模国風土記稿』によると、当寺は鎌倉光明寺開山の良忠の開創で、もと悟真寺といったが、後に戦乱で廃寺になり、天文10年（1541）に光明寺十八世の快誉が再興したと記している。また江戸時



正覚寺本堂復元図

代享保年中に尾張徳川家から本尊阿弥陀如来像の寄進があり、享保・元文中の尾州家早世の三位牌がおかれていたことを記しているので、18世紀中ごろ尾張徳川家と関係があったようである。

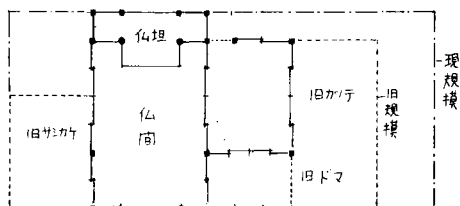
寺は飯島を見下し、鎌倉由比浜を一望のもとにおさめる景勝の地にあるが、後がすぐ急勾配の山にな

るため、寺地はせまい。現在の寺地から考えて、たとえ、当寺が古い由緒をもつとしても、おそらく草庵程度の堂から出発したのであろう。いま寺に残る古建築は本堂1棟であって、庫裡は新しい建物である。

本堂は桁行6間梁行5間の規模をもち、茅葺寄棟の屋根をあげ、前面に一間の向拝をつける。内部は内陣廻りと、前側の入側縁部分および建具構えに改造があるが、当初の間取は六間取の前に入側を設けた方丈形式の堂である。内部について若干注意されるのは内陣向って左側の室だけに床と床脇がつき、その反対の右側の室が閉鎖的になる点であって、こちらの室が格の高い座敷であったらしい。柱は直接桁をうけ、軒は化粧軒裏で、内部も当初部分は竿縁天井である。建立年代についての資料は見当らなかったが、江戸時代後半の建築とみられ、そのころの比較的小規模な方丈形式の簡素な本堂の1例である。

2. 海前寺庫裡（時宗）

小坪浦の西端にあり、寺地は崖際の少し小高い地になり、となまれ、東向の本堂と南向の庫裡がある。当寺の沿革については明らかでないが、文久2年（1862）に全焼したと伝えられている。なおこの点に関して『逗子市誌』第5集所収年表では文久2年海前寺本堂流出と記しており、火災か流出かなお後考の余地がある。現在の本堂は新しい建築であって、庫裡だけが古い。しかし、庫裡も様式手法上から幕末をのぼるものでなく、文久災害後の再建であろう。当寺の庫裡は茅葺屋根を鉄板葺に改め、内部も増築と改造によって当初の姿と大きく変わっているが、もとは桁行5間梁行3間半の小さな建物であった。当初の間取は純粹の庫裡でなく、本堂兼庫裡であって、向って左側の10畳大の室が仏間であり、その右側3間に庫裡としての6畳および4畳2室と台所および土間が配されていたらしい。このような間取は本堂兼庫裡としては最小限のものと考えられ、江戸時代末のごく小さい寺に簡単なものであったことが知られる。ただし仏間部分の仏壇の取付、柱は上に粽をつけ、柱上に三斗組を配して、仏間にふさわしい内部としている。



海前寺庫裡（旧本堂前庫裡）

3. 小坪寺本堂（浄土宗）

当寺は明治39年火災によって全焼し、鎌倉の光明寺経藏をうつして本堂としたと伝える。現在の本堂は移建時に向拝をつけ、さらに周囲に大きく庇をつけて本堂に必要な広さをとったものである。そのため、外観は向拝つき宝形屋根の堂本体の三方に庇をつけた低い堂姿となっている。光明寺から移建した前身建物は角柱を用いた方3間の堂であって、内部に2本の来迎柱がたつ。来迎柱上は禅宗様貫および台輪をわたり、出組斗拱をくみ、中備に裏股を配する。このあたりの絵様線形の性質をみると光明寺時代の前身堂は18世紀前半ごろのものとみられるが、その後にも改造があったらしく、正面中央柱間の楣の絵様は幕末ころである。なお前身堂が寺伝のように光明寺経藏とすれば『新編相模国風土記稿』光明

寺の条および絵図にみえる三間宝形造の経堂に当ると思われる。ただし経堂に來迎柱がたったのはやや不審であり、光明寺における前身建物についてはなお検討の余地がある。

4. 伊勢町八幡宮本殿および覆屋

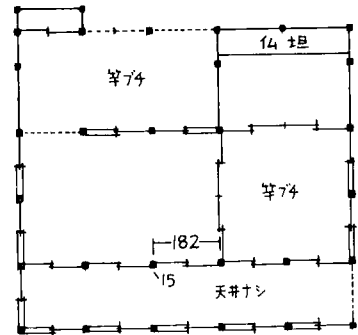
当社の本殿は石造覆屋の中にあり、一間社流見世柵造の柿葺社殿である。身舎部分の斗栱は出組、中備は裏股であり、向拝の軒を二軒とする。小社殿であるが、幕末ごろの本格的な手法をみせる。覆屋は切妻造の石造建築である。一般に小社の覆屋は簡単な木造であるが、当社のように石造の覆屋を設けるのはたいへん珍しい。石造の構法は洋風の手法になり、正面入口にアーチをかけ、石の継手には丁寧な鋳を用いている。また石造覆屋の前面には彫刻装飾を盛んに用いた妻入切妻造の向拝が設けられている。覆屋の内部は外壁にそって木の柱をたて、この柱で小屋組をうけ、棧瓦葺の屋根をかける。以上のように、当社は幕末期の流造社殿を洋風手法の石造覆屋でおおったものである。とくに木造切妻造向拝と洋風の構造をとり入れた石造覆屋の組み合わせは伝統と洋風の混在をしめし、明治・大正文化が、当社のような小社に反映しているのである。なお、石造覆屋の建立年代は大正12年である。

5. 桜山金剛寺本堂（真言宗）

寺史の詳細は明らかでなく、桁行5間、梁行4間半の茅葺寄棟屋根の小さな本堂があるだけで、寺地もせまい。しかし、当本堂は住房風の小さな堂として見逃せない建築であって、構造・細部手法とも本格的であり、様式上17世紀末ごろの建築とみられる。

外観は一見すると農家風であるが、もとは前面の付庇がなく、軒は前面と両側面を出桁造し、後半間を葺きおろしとする。出桁造は関東地方では庫裡に一般的に用いられた手法であって、民家に出桁造が普及する幕末期より前に広く庫裡等に用いられ、実例からみるとすくなくとも江戸初めころから用いられたらしい。したがって当本堂は葺きおろしの民家よりも一見丁寧なものである

ことが理解されよう。また両側面とも出桁造である点からみると、当本堂は当初から桁行5間の規模であつたらしい。



金剛寺本堂

内部の間取は田字割の四室の前側に1間幅の入側を設けたもので、田字割は前後を2間と1間半、左右を3間と2間に分割するから、均等分割でなく、左側2室の広さの方が大きい。このうち、仏間は右奥の6畳大の室である。仏間と壁で仕切られた左の9畳大の閉鎖的な室は納戸とみられ、また納戸前の12畳大の室は広間とみられる。したがって当本堂は江戸時代の一般寺院本堂に広く用いられた方丈形式と全く異なる系列に属する建築であって、間取からみれば仏間を設けた住房風の本堂といってよく、いまこの種の小本堂は江戸時代の中のものでもあまり類例がない。

つぎに間仕切装置をみると、外廻りは各間ともに3本溝の敷居、鴨居が用いられ、仏間前の8畳の右

手は腰高窓になっている。また内部で注目すべき点は、納戸とその前の12畳の室との境にも3本溝の敷居・鴨居が用いられていることである。このような手法は寺院庫裡では住職の室とその手前の広い室の境に往々みられるものであって（例、箱根町早雲寺庫裡、横浜弘明寺庫裡）、住職室の前の間仕切の意匠的扱いであった。また天井については、前側の入側は天井をはらないが、8畳室と納戸は当初の竿縁天井が残り、竿縁は太くて古めかしい。なお12畳大の室の天井は後補である。

構造は内部の柱が側廻りより高い下屋造であり、柱は15センチ角の良質の榿材である。母の柱は民家では大体17世紀末ごろまでの上級民家に用いられ、18世紀以降杉材に変わってゆく。この点からみても、当本堂は降っても18世紀初めころとみられる。

以上のように当本堂は江戸中期の初めころの住居風本堂であり、小規模ではあるが本格的な構造手法になる建築である。

6. 池子神明社神輿

この神輿は地元では英勝寺より拝領したものと伝え、祭礼の時にかつぐときも丁重に扱われたといわれている。今回調査に内部の墨書により、天保12年に鎌倉扇谷の河内長左衛門武則によって作られたことが判明し、その後明治13年および44年に彩色の修理があったことも知られた。鎌倉扇谷の河内長左衛門は建長寺大工であって、江戸時代の建長寺大工河内氏は鎌倉周辺に広く腕をふるったことが知られている。神輿は方2尺の大きさであって、出組斗拱を詰組に配し、軒は二軒繁垂木である。幕末の天保12年（1841）の作であるが、煩雑な彫刻装飾を用いず、よくまとまった意匠をみせ、細部も実際の建築と同じに作られている。

○内部繫材下端墨書銘

天保十二辛丑	寺領扇谷住人
天王神輿新造	河内長左衛門武則
	後藤斎宮真慶（花押）

（後補材を打付く）

○批把板墨書銘

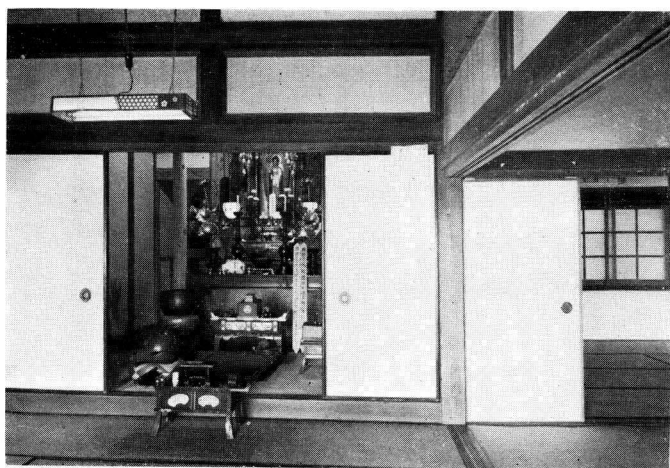
明治拾三年「辰七月日」神輿彩色細工人「州三浦郡秋谷住人」橋本浄貞「新倉久兵衛」

○内部後補繫材下端墨書

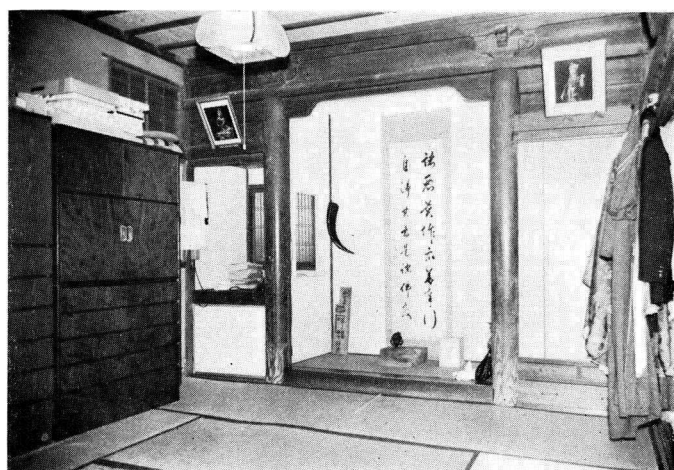
明治四拾四年一月吉日「神輿彩色」仏子鎌倉大町住人「山田誠一郎」



正覚寺 本堂正面



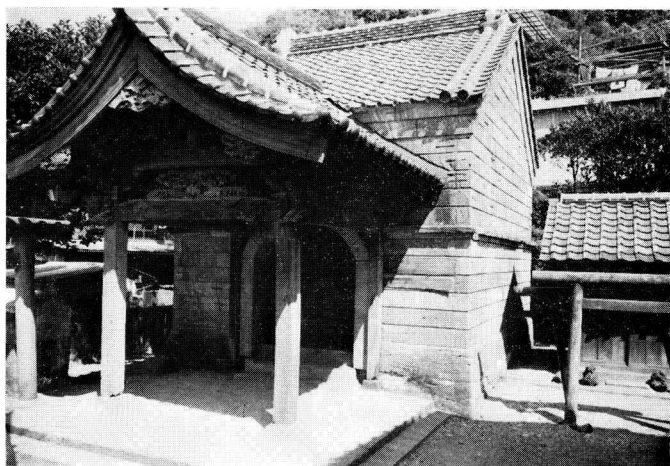
正覚寺 本堂室中の間



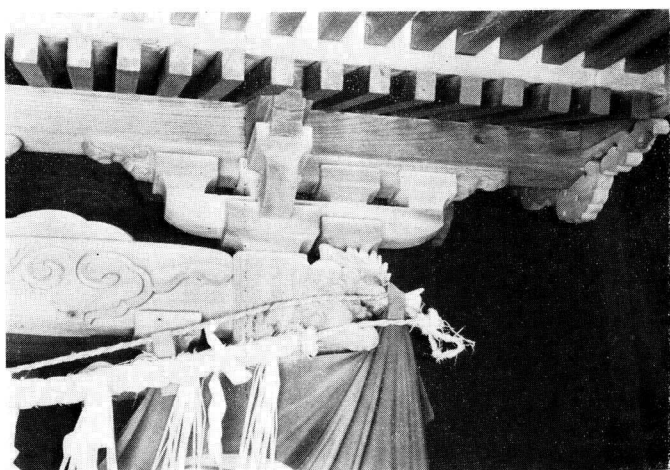
海前寺 庫裡仏間



小坪寺 内部



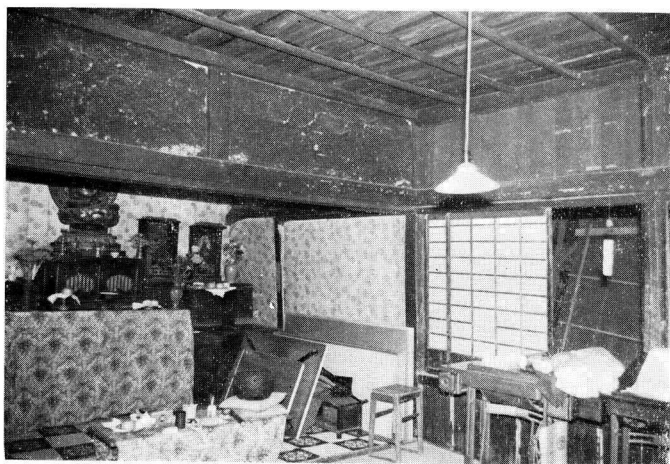
伊勢町八幡宮 覆屋



伊勢町八幡宮 本殿向拝細部



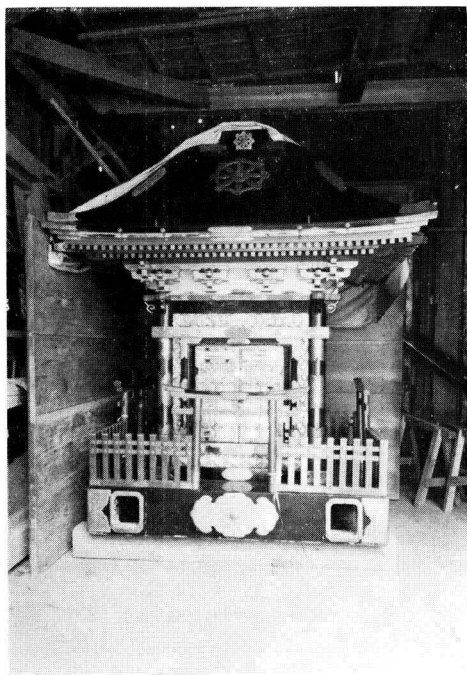
金剛寺 外観



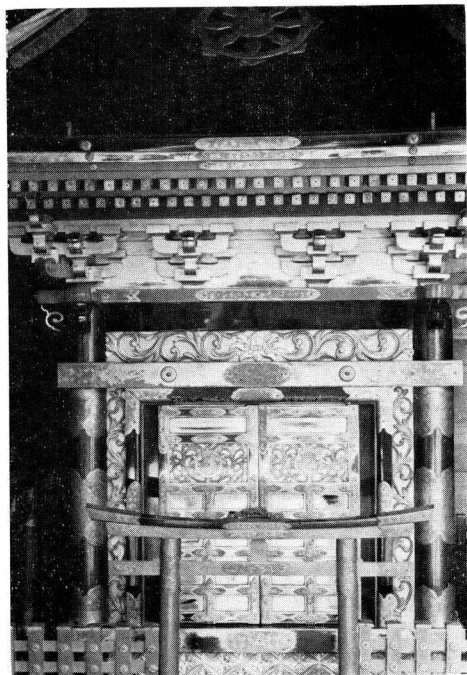
金剛寺 仏間



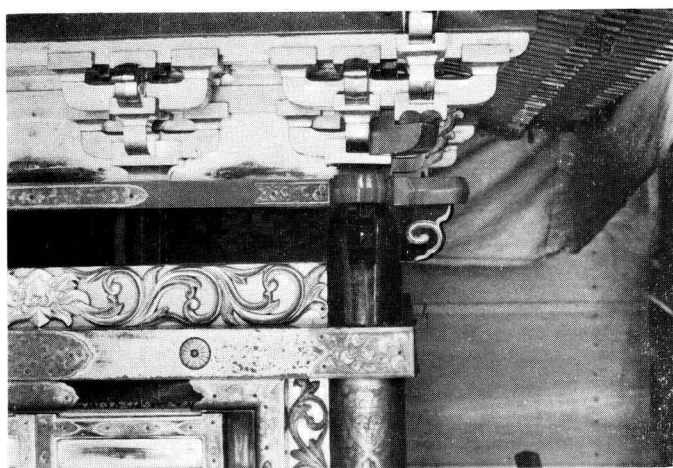
金剛寺 上部架構



池子神明社 神輿全景



同 左 部 分



池子神明社 神輿軒斗拱

寺史と彫刻・絵画

貫 達 人
三 山 進

正覚寺の寺史	17
正覚寺の彫刻	19
(1) 木造阿弥陀如来立像	
(2) 木造観音・勢至両菩薩立像	
(3) 木造阿弥陀如来立像	
(4) 木造地藏菩薩立像	
(5) 木造善導大師立像	
(6) 木造法然上人立像	
(7) 木造記主禅師坐像	
海前寺の寺史	23
海前寺の彫刻と絵画	24
I 彫 刻	
(1) 木造阿弥陀三尊立像	
(2) 銅造誕生仏立像	
(3) 木造地藏菩薩坐像	
II 絵 画	
(1) 紙本着色十三仏来迎図	
(2) 紙本着色阿弥陀聖衆来迎図	
小坪寺の寺史	29
小坪寺の彫刻	31
(1) 木造阿弥陀如来立像	
(2) 木造阿弥陀如来立像	
(3) 木造地藏菩薩立像	
仏乗院の寺史	36
仏乗院の彫刻	36
(1) 木造阿弥陀如来立像	
(2) 木造不動明王立像	
(3) 木造弘法大師坐像	
高養寺の寺史	42
高養寺の彫刻	42
(1) 木造不動明王及び二童子立像	
(2) 木造弘法大師坐像	

正覚寺の寺史

貫 達 人

正覚寺は浄土宗、住吉山悟真院と号す。寺蔵の過去帳によると、開山は鎌倉光明寺を開創した然阿良忠（記主禪師）で、はじめ良忠院悟真寺と号したという。『新編相模国風土記』は「記主禪師駐錫の旧跡なり師の開居せし岩窟
今に境内にあり、其頃は悟真寺と云へり」と伝えるが、これは「鎌倉佐介浄利光明寺開山御伝（然阿上人伝）」に、然阿良忠が仁治元年（1240）鎌倉に入り、住吉谷悟真寺に住んで浄土宗を弘めていた、とある記事をうけているのであろう。この開山御伝には「葬送住吉瓶フツボ子山麓茶毘所」ともあるので、正覚寺の地は、良忠を茶毘に付したところかもしれない。

然阿良忠は然阿弥陀仏と称し、石見国（島根県）三隅荘の人。弁阿上人から血脉相承をうけた。諸国を遍歴したのち、仁治元年鎌倉に入り、まず大仏谷に住み、のち住吉谷の悟真寺に駐錫して浄土宗を弘通した。その間、北条経時の尊信をうけて佐介谷に創建された蓮華寺（光明寺の前身）の開祖となった。この寺は、数年後の寛元元年（1243）「震旦西都本寺」に准じ、「日本西山粟生浄利之例」に任せて寺名も光明寺と改め供養した。

中興開山は光明寺18世の快誉上人とする。上人は天文10年（1541）3月14日、これまでの良忠院悟真寺をあらため、正覚寺を起立したといい、過去帳には「快誉上人ヨリ住吉山悟真院正覚寺ト云也」と記す。しかし、快誉上人の事跡は不明で、光明寺蔵の「当山代々年代略記」にも「真蓮社快誉上人、天文十五丙午二月三日寂、」とあるだけで、わずかに天文15年（1546）の示寂を知るのみである。

ともかく、正覚寺の草創縁起やその後の詳しい寺史はたどれない。『新編相模国風土記』に「一旦戦争に逢て廃寺となり、後天文十年光明寺十八世真蓮社快誉再興す」とあるように、おそらく当寺背後の山に住吉城という城郭が構えられていたため、ここを舞台に繰り広げられた合戦で、寺は大きな被害をこうむり、寺宝や記録類を失なったことであろう。こうしたことは小坪の社寺全てに言えると思われる。

正覚寺の復興は江戸時代に行なわれたようである。寺蔵の寛政9年（1797）書上帳が、そうした事跡を伝えている。記主禪師の旧跡であるということや徳川家の保護のもとに栄えた光明寺の末寺ということなどから、保護の手がさしのべられたのかもしれないが、とりわけ、尾張中納言宗春との由縁が深く、これが現在の寺の再興におおいに寄与した。『新編相模国風土記』は「本尊阿弥陀は尾張宗春卿の側室民部女（持）の念寺仏にて享保中寄納あり」と記し、過去帳も、像は民部卿所持のもので、入仏の儀は享保20年（1735）5月7日に行なわれたことを伝えている。

当時の住持は、第十世身蓮社報誉上人（1749没）で在住53年に及んだという人。尾州家の像が正覚寺へ寄付されたのは、報誉上人が宗春の側室の病気を平癒してやった御礼だと伝えるが、この尾張家と報誉とを結びつけたのは、地元の願主高橋清右衛門だという。過去帳は「当寺濫觴者当村高橋氏於江府令仮宅、報誉トハ竹馬契不浅、依之求深縁尾州御朱殿ニ出入故云云、」と記す。この中で、当寺濫觴者と

いっているように、報嘗上人代の復興のほどが知られる。

なお参考まで、正徳5年（1715）の光明寺蔵『末山起立帳』から正覚寺分を抜粋しておく。

一起立 天文十五^{丙申}年二月三日

一開山 真蓮社快嘗上人

御除地

一惣境内 東西 貳拾間
南北 拾四間

一什金 無御座候

御年貢地

一上畑三畝貳拾九歩

御年貢地

一上畑拾四歩

御年貢地

一下畑拾九歩

御年貢地

一下畑五歩

一山 竪 三六間
横 六拾間

一檀那

一道心者寮

境 内 迄

同 所

姥 谷

同 所

境 内 続

家数拾五軒

壹 軒

相州鎌倉光明寺末山

相州三浦郡飯嶋村

住吉山正覚寺 (黒印) ○

報嘗團霊

正徳五^{乙未}年八月

また、小坪にあった富士見山養性院は、明治年間に正覚寺へ移されたと古老が伝える。たまたま、光明寺の『本末起立帳』に当寺の書上があったので、紹介しておきたい。

一起立 知^レ不申候

一開山 伝蓮社法嘗大哲上人

御除地

一惣境内 東西 拾七間
南北 拾八間

一什金 無御座候

御年貢地

一中畑六畝拾歩

御除地

一山 竪 貳拾間
横 八 間

一檀那

寺 之 脇

水 た れ

家 数 六 軒

相州鎌倉光明寺末山

相州三浦郡小坪村

(ママ) 富見山養性院 (黒印) ○

正徳五^{未乙}年八月

伝嘗聞貞

正覚寺の彫刻

三 山 進

(1)木造阿弥陀如来立像

像高63.3cm

正覚寺木尊。両手とも第1指・第2指を捻じ、右手は胸前で屈し、左手を垂下するいわゆる来迎印を結ぶ。蓮弁形拳身光の高さは89.4cm、台座高27.7cm。寄木造、玉眼嵌入、漆箔。彫技のかたい江戸時代の作品で、『新編相模国風土記稿』に次のような記事がかかげられている。

「本尊阿弥陀は尾張宗春卿の側室民部女の念持仏にて享保中寄納あり。寺伝に尾張中納言宗春卿の側室民部病に罹りし時、寺主報誓が祈誓により平癒ありければ、民部悦の余り望めるものを賽すべしと云ふに報誓本尊安置の志願を述べればやがて此像を寄附し、享保二十年五月七日入仏の式ありしと云」

(2)木造観音・勢至両菩薩立像

像高：観音42.9cm

勢至42.7cm

本尊両脇に安置。寄木造、玉眼嵌入、漆箔。両像とも膝をかなり屈して来迎の姿勢をとる。宝髻は高く装飾性が強いが毛髪は刻出は簡単。衣文刻出は写実を意図しているものの形式化がめだつ。江戸時代の作品であり、現在先の阿弥陀如来立像とともに三尊形式でまつられているものの、当初からの一具であったかどうかは定かでないため、一応別項をたてた。

(3)木造阿弥陀如来立像

像高58.6cm

現在は東京都台東区正定寺に寄託中。両手とも第1指・第2指を捻じ、右手は胸前で屈し左手を垂下。いわゆる来迎印の弥陀である。寄木造、玉眼嵌入、漆箔。首は襟間でさしこみ。衣文部にこまかな文様がよく残る。小像だが腹部の量感はかなりあり、衣文刻出も神経が比較的ゆきとどいている。江戸時代の作。足柄は後補。

(4)木造地藏菩薩立像

像高50.1cm

右手に錫杖、左手に宝珠をもち、頭光を背負って蓮台上に立つ。体軀扁平で、衣文刻出も簡単な江戸時代の作品。

(5)木造 善導 大師立像

像高49.2cm

善導は中国泗州の人。隋煬帝大業9年（613）に生れ、幼時から出家、20余才の時、玄中寺で道綽^{どうしやく}（562～645）の講義をきき、のちついに念仏三昧を体得し、悟真寺・光明寺等に住して修業と説法とにつとめた。帰依するもの多く、また念仏ごとに彼の口からは光明が出、人びとはその奇瑞に感じたという。永隆2年（681）歿。一説に同3年あるいは竜朔2年（662）歿ともつたえる。観経疏をはじめ著書もすくなくない。中国浄土教史上に大きな足跡を残しただけではなく、わが国の法然・房源・空が弥陀本願の素意をさと、専修念仏の一行に帰して浄土宗門をひらくにいたった機縁は善導の観経疏を読んだことにあるといわれるほど、日本の浄土信仰にも強い影響を与えている。

像は善導の生涯にふさわしく、合掌し、口をかるく開いた口誦念仏の形をあらわすが、人形化され、彫技はかたい。寄木造、玉眼嵌入、彩色。蓮台（高11.8cm）上に立ち、輪光背を背負う。江戸時代の作。

(6)木造 法然上人立像

像高49.0cm

わが国浄土宗の祖法然・房源・空（1133～1212）の肖像彫刻。寄木造、玉眼嵌入、彩色。蓮台（高7.8cm）上に立ち、輪光背を背負う。善導大師坐立像と同様、江戸時代の作。

(7)木造 記主禅師坐像

総高56.2cm

曲象に安坐し、両袖及び裾を垂下する頂相彫刻形式。両手に払子をにぎる（但し、現在は柄のみ）。寄木造、玉眼嵌入。彩色は厚く、一部に胡粉盛上がみられる。江戸時代。なお記主禅師については寺史参照のこと。



正覺寺
木造阿彌陀如來立像



正覚寺 木造観音・勢至両菩薩立像



正覚寺 木造記主禪師坐像

海 前 寺 の 寺 史

貫 達 人

海前寺は供養山三宝院と号し、藤沢清浄光寺末の時宗。本尊は阿弥陀三尊立像。嘉永5年（1852）の当寺過去帳によると、開山は永和2年（1376）8月に示寂した毘阿上人と伝えるが、惜くも開創の由来や寺史の詳細はたどれない。寺伝では、寺の創建は鎌倉末期で、寺容がととのったのが永和2年頃であるという。『逗子町誌』は、開基後「衰へたれども二十代より法灯明かにして今四十三世に至る。」と記している。もともと清浄光寺（遊行寺）の坊さんが当寺の住持職を兼務することが多く、ために遊行寺の隠居所的性格をもっていた。

さきの過去帳は文久2年（1862）、当寺が火災にあったことを伝えている。同年12月17日、寺は罹災し、鐘楼だけ残し本堂、庫裡を全焼した。そのため翌3年、現小坪寺の前身である報身院の観音堂をもらい受けて仮本堂とし、本尊の弥陀三尊を安置した、というのである。のち本堂は慶応元年（1865）建立された（逗子町誌）。現在の本堂は昭和8年、田中近然師代に再建されたものである。

海前寺の彫刻と絵画

三 山 進

I 彫 刻

(1)木造阿弥陀三尊立像

像高：阿弥陀77.5cm

観音 50.2cm

勢至 51.5cm

海前寺本尊。第1指・第2指を捻じ、右手は胸前で屈し、左手は垂下したいわゆる来迎印の阿弥陀に、蓮台を捧持する観音と、合掌した勢至との両菩薩を配する。菩薩像は2軀とも上体を斜め前に倒し、膝を曲げて来迎の動きをあらわすが、とくに観音菩薩像はそれが強調されている。三軀いずれも台座は蓮華座（中尊分高21.5cm、観音分高20cm、勢至分20.6cm）、光背は輪光背。台座・光背はみな後補である。

3軀とも寄木造、玉眼嵌入。肉身部漆箔。中尊像胎内に次の銘文の墨書された銘札が納入されている。

「天下和順 當三十六代心阿一静和尚敬白

南無阿弥陀佛奉彩色現當利益

日月清明 施主檀方中 (表)

佛師山之内住

三橋卯京

世話人

文政十三寅九月十七日 五兵衛 忠右衛門

重吉 吉郎兵衛。(裏)

文政13年(1830)に修理のおこなわれたことがわかる。三橋卯(右)京は江戸後期鎌倉仏師の一人。

中尊像は量感に富み、面部にも張りがあるが、衣文の刻出は一応写実を意図しながらも形式化をまめがれていない。一方両脇侍像は腰部から下の衣文表現の複雑さや、高くゆいあげた宝髪に宋風が認められるものの、やはり彫技はかたい。室町時代も半ばすぎの造立であろう。しかし永正10年(1513)銘の仏乗院木造阿弥陀如来立像とともに、逗子市内では貴重な室町彫刻である。

(2)銅造誕生仏立像

像高8.8cm

右手で天を、左手で大地を指さす通常の誕生釈迦像。蓮台(高3.7cm)も本体とともに鑄造。表情・

衣文・蓮弁いずれも表現は簡単で、一種素朴な味わいがある。像を納める木造厨子に次の墨書銘が残る。

『相州鎌倉新御堂 圓龍山向福寺 卅代俊因和尚時』（右側面）

『釈迦誕生佛・一・舍利塔二字 施主材木座與七納之』（背面）

『弘化三年年 九月吉祥日』（左側面）

向福寺については未詳。弘化3年（1846）をあまりへだたらぬ頃の商品であろう。

(3)木造地藏菩薩坐像

像高26.3cm

右手に錫杖、左手に宝珠をもち、輪光背を背負う。持物・光背・台座いずれも後補。膝前は別木、頭・体部は一木。彫眼。肉身の漆箔や着衣の朱も後補。

像底部に、

『文政六癸未 九月六日』

の墨書銘があるほか、台座表面に次のような銘文が墨書されている。

『文政六癸未年 九月六日 御縁日 小坪 船仲門中^(間カ)』

寺伝ではこの像は漁師の網にかかり、寺へ納められたという。文政6年（1823）は、台座等を補った年であろうが、像も江戸時代。

II 絵 画

(1)紙本着色十三仏来迎図

画面たて87.7cm

よこ46.7cm

十三仏とは、釈迦・薬師・阿弥陀・阿閼^{あしゆく}・大日の5如来、文殊・普賢・地藏・弥勒・観音・勢至・虚空蔵の7如来および不動明王をさす。これらの諸尊はすべて死者の中陰（死後の49日間）あるいは周忌などの法要にあたり、本尊としてまつられる仏菩薩明王であり、その信仰は十王思想と結びついて成立したと考えられている。冥界には閻魔王をはじめとする10人の王がいて、亡者生前の罪を裁き、生れ変わるべき場所を定める、と説くのが十王思想であり、わが国ではとくに鎌倉時代以降流行した。十王思想の場合、亡者がそれぞれの王の前で裁きをうける日が中陰と周忌とに応じて決められているが、十三仏信仰もそれに対応し、次のような組み合わせが想定されている。〔佐和隆研氏編『仏像図典』に主として拠る〕

不動明王	初七日	秦広王
釈迦如来	二七日	初江王
文殊菩薩	三七日	宋帝王
普賢菩薩	四七日	五官王

地藏菩薩	五七日	閻魔王
弥勒菩薩	六七日	變成王
薬師如来	七七日	太山王
観音菩薩	百ヶ日	平等王
勢至菩薩	一周忌	都市王
阿弥陀如来	三回忌	五道転輪王
阿閼如来	七回忌	蓮上王
大日如来	十三年	抜苦王
虚空蔵菩薩	三十三年	慈恩王

(ただし十王信仰では蓮上王以下の3王は登場しない。)

こうした十三仏をそろえて絵画に描くことは十王像の制作と平行しておこなわれたらしいが、一般に諸尊を坐像にあらわすものが多く、他に立像や来迎形式のもつくりられている。

海前寺本は各尊が雲にのって下向してくる来迎像であり、向って右最前列に不動明王を配し、以下諸尊をほぼおなじ大きさで表現する。画面上部で雲の尾を細めて動きを示し、仏菩薩像の肉身の金泥・菩薩の着衣や不動明王の火焰光の朱色など、彩色もよく残る。総体に各尊はずんぐりとしており、下ぶくれの顔がめだつ。江戸時代の作品であろう。なお画面向って左下隅に、

『先祖代々霊 施主
爲 菩提 飯島
心式海菫信女 忠右衛門』

の金泥書が残る。

(2)紙本着色阿弥陀聖衆来迎図

画面たて113.7cm

よこ 54.4cm

阿弥陀信仰者の臨終に際し、如来が観音・勢至両菩薩以下の諸菩薩をひきつれ、極楽浄土に往生せしめるべく雲にのって来迎するとの信仰にもとづき、平安時代以来、数多くの来迎図が描かれてきたことは改めて記すまでもない。海前寺本は木版刷に着色、ひとときわ大きく来迎印の阿弥陀如来立像をあらわし、その目から斜め下方にふたすじの光明が放射されている。その光の先に往生者が念仏をととなえつつ、来迎を待ちうけている、という設定である。先頭には蓮台を捧げた観音菩薩。合掌した勢至菩薩以下の諸菩薩が、あるいは楽器をかんで、あるいは歌舞しながらあとにつづき、空中には化仏が10体のほか、散華がちりばめられている。にぎにぎしく、しかも動きに富んだ画面で、如来の金泥のほか色もよく残るが、総体に形式化がめだつ。

また裏面には別紙が貼られ、上部中央に阿弥陀如来坐像を据え、像下に「相州藤沢山」とあるほか、多数の人名が墨書されている。藤沢山は海前寺本山の遊行寺(清浄光寺)。



海前寺 木造阿弥陀三尊立像



海前寺 阿弥陀聖衆来迎図



海前寺 十三仏来迎図

小坪寺の寺史

貫 達 人

寺は明治の火災で焼失した香蔵寺と報身院とを合併して再興された。その間の経緯は寺蔵の過去帳が語る。

明治40年（1907）12月26日の夜、報身院から出火した火は隣接の香蔵寺をも焼き尽し、わずかに無事だったのは本尊・過去帳の類だけであった。そして寺檀協議の上、香蔵・報身の両寺を合併することとし、翌年7月、長谷高德院（大仏）の住持転法輪行念を兼務住職に任命し、十月に至り香蔵寺跡へ再建工事を着手した。これには鎌倉円覚寺の塔頭景福軒（海会庵中の寮舎）を譲りうけ、間口十二間、奥行六間の客殿風本堂を建立したのである。本尊は破損が甚しかったので、東京芝清光寺から寄付されたのを奉安し、その供養は光明寺の武田芳淳僧正を導師として盛大に行なわれた。

翌42年4月、香蔵・報身両寺を合併して、転法輪山門尊院小坪寺と改称し再興することが正式に認められ、ここに小坪寺が創建されたのである。寺の中興第一世には、高德院住持、香蔵寺四十世でもあった善行念上人がなった。のち、寺は大正12年の震災で全潰したため、円我上人が光明寺の一切経蔵をもらいうけ現在の本堂を再建したという（逗子町誌）。

ちなみに、香蔵寺は旭照山阿弥陀院と号す浄土宗。開山は照誉上人、中興開山は寛正5年（1464）に示寂した珣誉上人（存公）とする。参考までに、鎌倉光明寺蔵、正徳5年（1715）の『末山起立帳』に次の記載がある。

・当寺起立	寛正五甲申年 正徳五乙未年迄 経武百八拾九年	
・開山	珣誉存公天節上人	
御除地		
一惣境内	東西拾四間 南北貳拾三間	
・什金	無御座候	
御除地		
一畑貳百五拾坪		境 内 続
御年貢地		
一畑壹畝九歩		同 所
御年貢地		
一上畑貳畝拾五歩		宮 之 下
	是者遺替代徳心と申道心者寄付之	
御年貢地		
一畑壹畝貳拾壹歩		姥 谷
御年貢地		
一畑壹畝五歩		同 所
御年貢地		
一畑一畝貳拾六歩		同 所
	是者四代已前建替代清久と申道心者寄付之	
一畑壹畝六歩		小 披 露

一畑拾六歩

右ニケ所建營代清久と申道心者寄付之、

御除地

一山 竪拾貳間
横四拾貳間

一檀那

相州鎌倉光明寺末山

相州三浦郡小坪村

旭照山阿陀院香藏寺二十八世

同 所

境 内 統

家数四拾壹軒

正徳五乙未年八月

(黒印)
万誓繫靈○

なお、『逗子町誌』によると、香藏寺焼失前の当寺本堂が仮校舎にあてられ、鷺浦学舎と称したという。小坪小学校の前身であったわけである。

報身院は遍照山浄土寺と号し同じく浄土宗。『新編相模国風土記』によると、開山は文明5年(1473)に寂した深營上人と伝えるが、正徳5年の鎌倉光明寺蔵『末山起立帳』は、開山示寂年月日をもって寺の草創と記している。世代は第十九世まで続いた。

一起立 文明五癸巳年七月十五日

一開山 伝蓮社深營上人

御除地

一惣境内 東西 三拾間
南北 拾八間

一什金無御座候

御年貢地

一中畑壹反壹畝八歩

御年貢地

一下畑拾六歩

一檀那

家数五拾七軒

一道心者寮

壹 軒

相州鎌倉光明寺末山

相州三浦郡小坪村

遍照山報身院

正徳五乙未年八月

(黒印)
徹營円的○

小坪寺の彫刻

三 山 進

(1)木造阿弥陀如来坐像

像高42.5cm

現在の本尊。寄木造、玉眼嵌入。全身金泥、螺髪は群青にそれぞれ塗る。二重円光に蓮弁形の縁光をつけた光背（高68.4cm）を背負い、きわめて装飾性の濃い台座（高63cm）上に定印を結んで安坐する。光背のうち頭光部には、裏面に「藤原金益」の名を刻した銅鏡をはめこんでいる。彫技はかたく、形式化がめだつ。

なお、寺蔵文書中に次のような記録があって伝来が知られる。（寺史を参照されたい）

「明治四拾三年五月貳拾四日、本尊遷式ヲ挙ク。

是ヨリ前同四拾叁年十月再建工事ニ着手ス、則チ円覚寺中景福菴堂舎ヲ譲リ受ク、工費金貳千六百円ノ予算ヲ以テ、間口拾貳間、奥行六間ノ客殿造総瓦葺ノ老棟落成セリ。

本尊ハ破壊甚シキヲ以テ、芝清光寺ヨリノ寄附ニテ奉安センモノ也。

本日天照山主武田芳淳僧正ヲ大導師ニ天童音楽出勤僧五拾余員ニテ安田綱藏宅ヨリ練供養ヲナス。

同貳拾五日宗祖円光大師ノ七百年ノ法要举行、練供養前日ノ通りナリ。空也念仏等アリテ頗ル盛大ヲ極ム。本山ヨリ住職ニ中興号、総代一同ニ院号授与アリテ其功績ヲ賞セラル。」

また、過去帳の明治四十三年条に、次の一項がみえる。

「清蓮社浄營上人一行阿無上諦道老和尚 二月十八日 本尊寄附主芝清光寺一代隆信師」

(2)木造阿弥陀如来立像

像高77.3cm

両手の第1指・第2指を捻じ、右手は胸前で屈し、左手は垂下。いわゆる来迎印の阿弥陀如来であり、後補の板を台座としている。光背は欠失。頭部は耳の後で前後矧ぎ、胴部は背・左右・前面と寄せて内刳りはかなり荒いのみ痕を示す。布貼り、玉眼嵌入、肉身は漆箔、衣は朱。両手首先と右足首先及び左足先が後補のほか、面部の鼻などにも幾分後世の手が加わっている。

首はさしこみで固定されておらず、次の2種の銘文が読める。

『^(再カ)
□興ハ

貞享貳乙丑天

香蔵寺廿六代長譽□處』（後頭部内朱漆書）

『治安二壬戌貞享三迄凡六百六十四年

定潮御作扇谷菊池加賀守

南無阿弥陀佛

相州三浦郡 小坪村 香蔵寺 (首柙背面朱漆書)

これらの銘文によれば、像は、治安2年(1022)に仏師定潮の手で造立され、貞享2年(1685)に仏師菊池加賀守が修理、元来香蔵寺にまつられていた、ということになる。「新編相模国風土記稿」香蔵寺の条に、

「本尊弥陀長三尺二寸定朝作」

とみえるのがこれに当るのであろう。寺史に明らかな通り、小坪寺は香蔵寺と報身院とが合併して成立した。香蔵寺伝来の像がうけつがれていることは不思議ではない。あとでふれる地蔵菩薩立像も同様の来歴をもつ。

では、造立年時と作者との問題はどうか。

『相模国風土記』が記す‘定朝’が、藤原時代の代表的仏師定朝を指していることは疑いない。そして治安2年といえ、定朝が京都法成寺関係の造仏にたずさわり、はなばなしい活躍をはじめた年にあたる。だが、この像を平等院鳳凰堂阿弥陀如来坐像とおなじ作者の手になった作品とみなすことは、とうていできない。玉眼嵌入や寄木法から推しても、藤原時代の造立とも思えない。前面の衣文表現には鎌倉地方に通常の写実を意図した深い刻出とは別趣の、浅い刻出が認められるとはいえ、やはり中世にはいつてからの造立と考えられるのである。

とすれば、『相模国風土記』の‘定朝’は、銘の伝える‘定潮’の誤記とするほかはない。そして多分、‘定潮’にしても‘じょうちょう’の音を、かりに漢字にあてはめたにすぎないであろう。

‘じょうちょう’の名をもつ仏師は、たしかにこの地方にいた。法眼浄朝である。生没年をはじめくわしい事績はまだ明確でないが、浄朝の名は、鎌倉極楽寺木造興正菩薩坐像の銘文中に登場する。この像は最初嘉元4年(1306)に造立されたものの、火災で胴部を焼失、応永32年(1425)に胴部を補った。担当したのは仏師兵部法眼清朝であるが、像胴底部朱書銘に、

「大仏□□部法眼浄朝弟子□□」

という一文がみられる。おそらく、清朝は浄朝の弟子だったのであろう。

他に資料が発見されていない現在、これ以上の推測を重ねるのは危険には違いないが、もし上の想定が正しいとすれば、法眼浄朝は14世紀後半ごろから15世紀はじめごろまで、鎌倉辺で活躍していた仏師だったのではないかと……と思われる。そして、もしかすれば、この浄朝が‘定潮’と同一人物なのかもしれないのである。

だが、念をおすまでもなく、これはひとつの想像にしかすぎない。ここではただ定朝とは別に‘じょうちょう’なる仏師が実在していた事実を指摘するだけにとどめておく。

一方、貞享2年に修理をおこなった菊池(地)加賀守は、鎌倉仏師の一人であり、現在次のような事績が判明している。

万治3年（1660）鎌倉本覚寺木造宝冠釈迦三尊坐像の台座・光背等の補造。

延宝5年（1667）鎌倉長谷寺木造十一面観音立像修理。

この外、たんに扇ヶ谷住加賀を名のる仏師の事績も多いが、菊池（地）加賀守との関連は現在のところ明確でない。後日に期したい。加賀守が修理した時には、香蔵寺像造立期の銘文が或る程度残っていたため、先に引いた首柄部のような銘が記されたのであろうが、治安2年の年記がなぜ書かれたかは謎というほかはない。

結局、本像については未解決の問題がまだまだ残されていることになる。造立年代の推定もきわめてむずかしく、後日に期したい。

(3)木造地藏菩薩立像

像高77.4cm

右手に錫杖、左手に宝珠をもち、蓮台上に立つ（台座高25cm）。光背は欠失。寄木造、玉眼嵌入。肉身金泥。衣文部にもこまかな金泥の文様を描く。この像は先の木造阿弥陀如来立像と同様、香蔵寺伝来品であり、『新編相模国風土記稿』同寺条に、

「地藏 長三尺運慶作」

と記されている。

像は全体にかなり量感に富み、面部も理智的にととのい、衣文刻出は深く、写実的な味わいを出そうと試みていることが感じとれる。一見、宋風を加味した慶派風の彫技を思わせるが、とうてい運慶にまではさかのぼらない。そして、仔細に拝すると、衣文表現にも形式化が認められる。鎌倉を中心としたこの地方には、中世の作風を相当忠実にうつす近世の擬古作が点在するので、あるいは本像もそうした作例のひとつではないか……と想えるが、正確な年代決定は今後の類似の作品の調査をまつことにしたい。



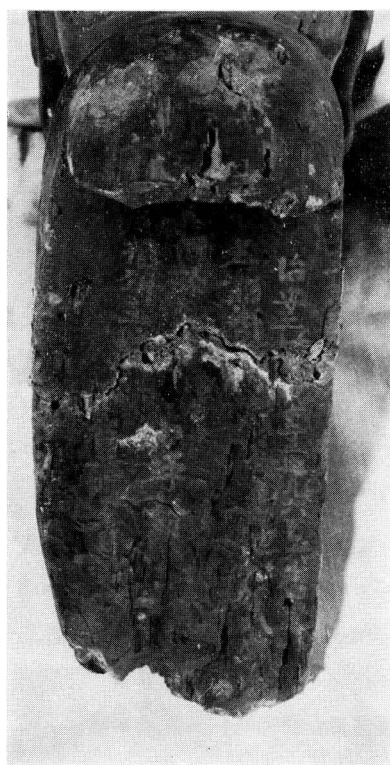
小坪寺 木造地藏菩薩立像



小坪寺 阿弥陀如来坐像



小坪寺 木造阿弥陀如来立像



同 銘

仏乗院の寺史

貫 達 人

海潮山阿弥陀寺と号し、延命寺末の古義真言宗。『逗子市誌』（第一輯）は、宝永2年（1705）の創建で檀家数28と伝えている。また、同書は「（前略）本尊阿弥陀二尺三寸の立像及高野山より分たる不動尊二尺三寸の二体を祀る。南町の南端にして前は磯浜を隔てて小坪湾を臨み後は峨々たる山を背負ひ眺望佳なり。」とも記す。

本尊阿弥陀如来像の宝永2年（1705）胎内文書（彫刻の
項参。）に「南海印山仏乗院」、同安永4年（1775）のものに「海潮山改阿弥陀寺仏乗院」とあり、山・寺号の変わったことがわかる。また同文書によると、寺は江戸時代に、小坪浜岡の人々から厚く信仰された様子がしのばれる。不動堂（浪子不動）が江戸末期ごろ仏乗院持であったことも、当院の寺勢を偲ばせるものがある。が、惜しくも寺の創立事情やその後の歴史はたどれない。

仏乗院の彫刻

三 山 進

(1)木造阿弥陀如来立像

像高77.8cm

仏乗院の本尊。左右両手とも第1指と第2指とを捻じ、右手は胸前で屈し、左手は垂下し、後補の蓮台（高47.3cm）上に立つ。光背は蓮弁形举身光（高101.0cm）、現在は像を納める厨子にとりつけられている。同じく後補。寄木造、玉眼嵌入、漆箔。首は襟間でさしこみ、胸部裏面に、

「永正十年八月日

□□□□□□

の墨書銘がある。また、胎内には次の2種の文書が納入されている。

（その1）

『佛乗院本尊運慶之阿弥陀如来繁昌処

（梵字7行半略）所願圓滿ノ喜悅書入ル」右息災方之檀那中勿論當院代之旦那現當二世之」浜岡男女守護之処當寺本尊阿弥陀如来者ハ」本是施主婦命シ奉弥陀ナリ然ル阿弥陀如来ト者本ト是」八葉中台ノ大日不二性徳ノ本佛也此度再興修福」寺内安穩院内繁昌并彼尊ノ十方旦那應現随一」西方國土教主ナリ是此ノ佛安養宝刹ヲ開九品蓮台殿」觀音勢至等諸ノ衆生有縁ノ衆生ヲシテ彼蓮台ニ至ヲ建立」令致者也

于時宝永二乙酉 天林鐘中旬十五日

眞海（花押）
一代

相州三浦之内小坪村南海印山佛乘院

浜岡旦那』

（その2）

『本尊阿弥陀如来之象^{（ママ）}

右者安永四乙未 七月吉日

再興建立致者也

海潮山改阿弥陀寺佛乘院

現住興道代（花押）

佛師

野村興七

笹下村

佛乘院旦那

新宿

三郎左衛門

小坪浜

太郎兵衛』

以上の銘文及び胎内文書により、この像が室町時代の永正10年（1513）に造立され、江戸時代の宝永2年（1705）と安永4年（1775）との2度にわたって修理されたことがわかる。

法量はさして大きくはないものの量感は失われておらず、衣文の表現も複雑で写実を意図している。背面の刻出も省略されず、彫技は丁寧だといえよう。強い曲線を示す髪際・細い両眼に特色の認められる面部も張りがある。鎌倉時代風をうけついで室町彫刻としては、逗子市内では傑出しており、造像期も明確な点貴重である。

なお、胎内文書（その1）の記文中、省略した梵字は大森順雄師のご教示によれば、弥陀三尊種子・浄土変・光明真言・阿弥陀如来根本陀羅尼。

(2)木造不動明王立像

像高73.5cm

右手に剣、左手に羂索をもち、火焰光を背負って岩座上に立つ。腰をひねり、右足に重心をのせ、左足の拇指は上にそらす。動きを示す波切不動型の像である。寄木造、玉眼嵌入、彩色は厚く、着衣文様には胡粉盛上が部分的に用いられているが、この彩色はあとのものと思われる。框座内部に次のような墨書銘がある。

『天和三癸亥 三月江戸石町大佛師法眼良心』

『小坪村諸旦那奉加代々木尊佛乘院眞海一代』^(ママ)

天和3年(1683)は像の造立期を示すとみても大過はないであろう。胸部・腹部等に量感があり、腰下前面部の衣文刻出は深いが背面では形式化がめだつ。

(3)木造弘法大師坐像

像高31cm

右手に五鈷、左手に念珠をそれぞれ持って椅子上の上畳に坐す通常の大師像。寄木造、玉眼嵌入。首は襟間でさしこみ。彩色は厚いが後補。

上畳裏面に次のような墨書銘がある。

『天和元年』酉林鐘吉日』佛乘院一代眞海』

また、次の墨書をもつ銘札が胎内に納入されている。

『 文政十亥天

(梵字一)奉再造弘法大師

四月吉日 栄道代』(表)

『 惣兵衛 太兵衛 大佛師雪下

話

四兵衛 茂左エ門 吉田成芳

世

茂次兵衛 新右エ門 伊澤眞乗

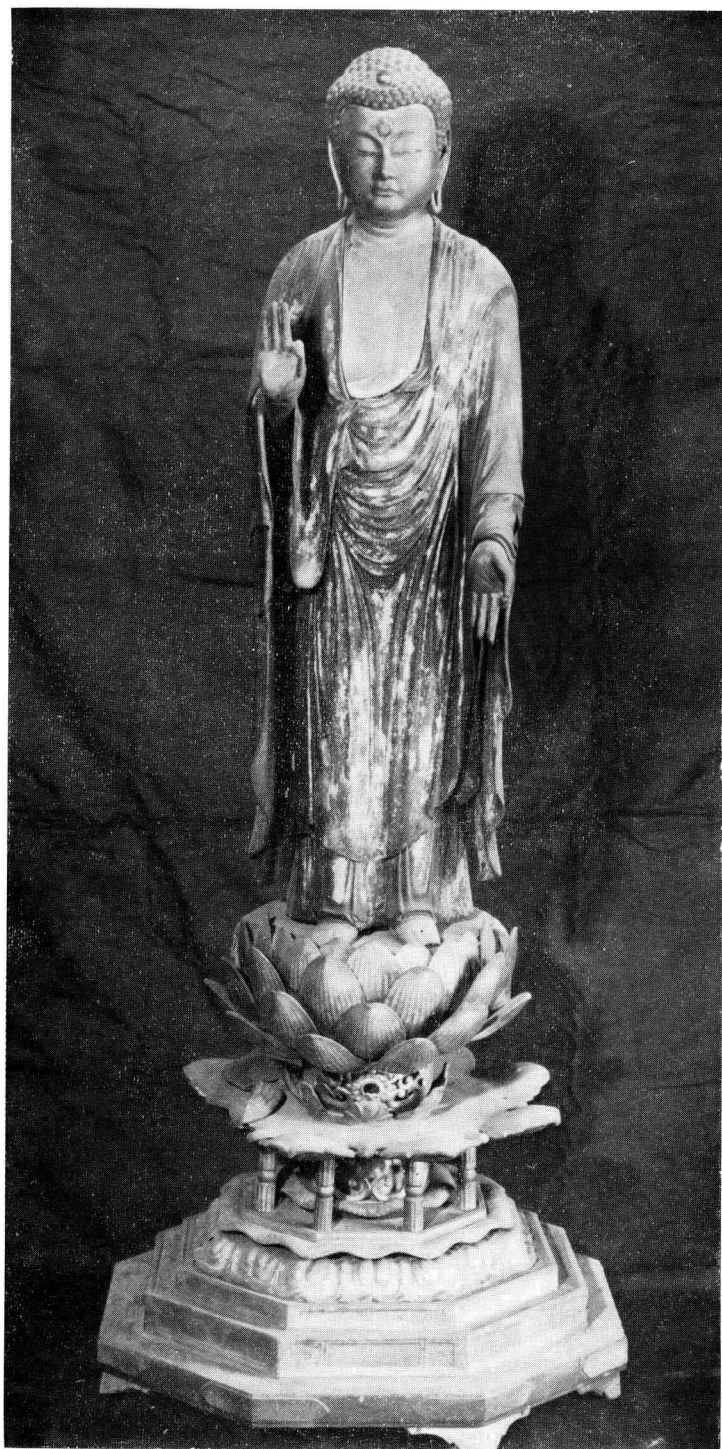
人

与左エ門 長左エ門 同幸治良』(裏)

天和元年(1681)に造立され、文政10年(1828)に修理されたことがわかる。再興にたずさわった仏師たちは、いずれも鎌倉仏師であり、吉田成芳に関してはいまのところ他に資料が見出されていないが、伊沢眞乗と幸治良は父子。天保5年(1834)の鎌倉極楽寺木造弘法大師坐像銘に、

「扇谷邑仏師、伊沢善助・幸治郎・董能」

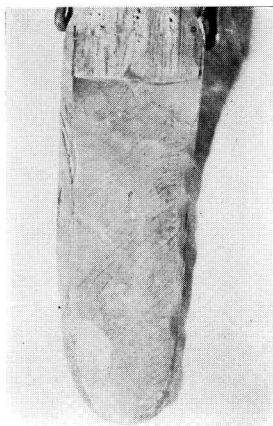
とみえるので、眞乗と善助は同一人と思われる。善助の事績については、『逗子市文化財調査報告書第2集』の東昌寺木造地藏菩薩坐像の項を参照されたい。



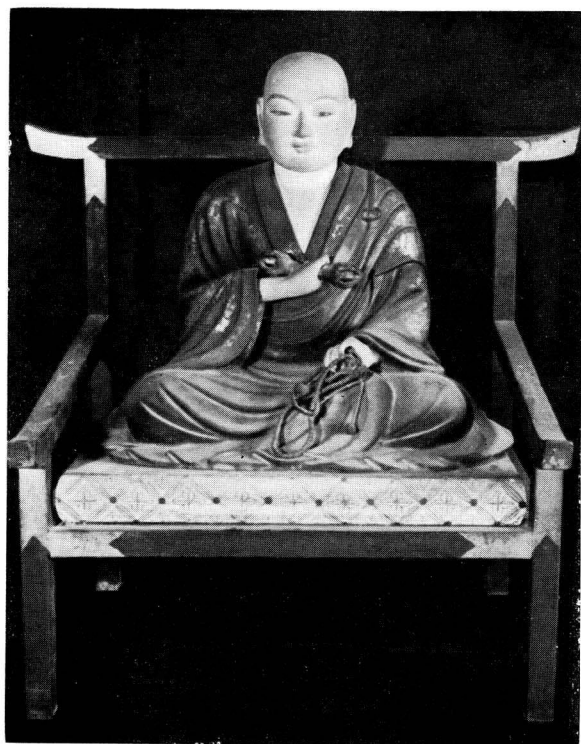
仏乗院 木造阿弥陀如来立像



仏乗院 木造阿弥陀如来立像上半身



同 銘



仏乗院 木造弘法大師坐像



仏乗院 木造不動明王立像



同 銘

高養寺の寺史（浪子不動）

貫 達 人

高養寺は真言宗、白滝山と号す。寺伝では弘法大師が開山し、岩窟内に2尺余の不動尊像を安置したのが、寺（不動堂）の起りだとする。さらに次のような伝説が残る。

昔、この地の岩窟のわきに大きな滝があったことから滝の沢という地名がつけられ、不動尊は白滝不動とよばれていた。が、その後、鎌倉時代を通じて人々から忘れられてしまう。文和2年（1353）頃、夜になるとこの滝の沢から奇光が出て、漁ができないという不思議な現象が生じたとき、頼基法印がこの地に不動明王像をみつけ祈願したことによって、再び漁ができたという。また、この不動尊は小坪の漁舟を暴風雨から護ったことから浪切不動と呼ばれたという。

江戸時代には小坪仏乗院持で、『新編相模国風土記』には「不動堂小滝不動と号す、仏乗院持」とある。現在は池子東昌寺の兼務。

明治時代には、徳富芦花の小説『不如帰』の舞台として有名となった。小説のヒロイン片岡浪子にちなんで浪子不動とよばれるようになり、昭和8年には堂前の礎に不如帰の文学碑が建てられた。

現在の堂は、葉山慶増（啓蔵）院の建物を昭和28年に移したものだ。慶増院は日朝山大聖寺と号した真言宗。近世無住となったとき、関西画壇の一人黒住章堂氏が画壇内の不和から出家入道し、昭和の初め当寺に入って復興を志した。観音像一万幅を描いて弘通を念じると共に、高橋是清・犬養毅の援助をうけて本堂を建立し、堂内の天井画、ふすま絵を自ら描いた。そして寺名も後援二者の一字をとって高養寺と改めたのである。

その頃、浪子不動も堂再建の計画があったことから、慶増院の本堂を移建することとなる。この移建については、昭和28年3月1日認可され、同12月38日に移築を完了している。

ちなみに、堂の傍にはひっそりと石造五輪塔がたたずむ。これも慶増院から遷された。乾元2年（1303）、沙弥行心の銘をもつ重要文化財で、当寺の最もすばらしい寺宝である。

高養寺の彫刻

三 山 進

(1)木造不動明王及び二童子立像

像高：不動明王46.1cm

童 子 各19.0cm

3 軀それぞれ別の岩座上に立ち、不動明王像は右手に剣、左手に絹索（現在欠失）をもつ。光背は後

補の火焰光だが、さらにそのうしろに滝を現すか……と想える板状の飾りを置く。各軀とも寄木、彩色。不動明王のみ玉眼嵌入、矜羯羅・制吒迦の両童子は彫眼。

框座裏に次のような墨書銘がある。

『貞享四年丁卯祀

相陽三浦

霜月吉辰日

堀之内

智証大師御作

葉山

佛工鎌倉扇谷

三橋左京

慶藏院 』

智証大師御作はもちろん伝説にすぎず、形式化した彫技からみて、貞享4年（1687）頃の造立と考えて大過ないであろう。

三橋左京は鎌倉仏師の1人。現在までのところ、

延宝5年（1677）鎌倉長谷寺木造十一面観音立像修理

同 9年（1681）鎌倉妙本寺木造七面大明神像造立

元禄3年（1690）鎌倉岩船地藏堂木造地藏菩薩像修理

などの事績が判明している。なお、銘文中の慶藏院と高養寺との関係については寺史を参照されたい。

(2)木造弘法大師坐像

像高43.9cm

上疊座上に坐す通常の大師像。右手持物は現在欠失。寄木造、玉眼嵌入、彩色。彫技はかたく、総体に形式化がめだつ。江戸時代の作。

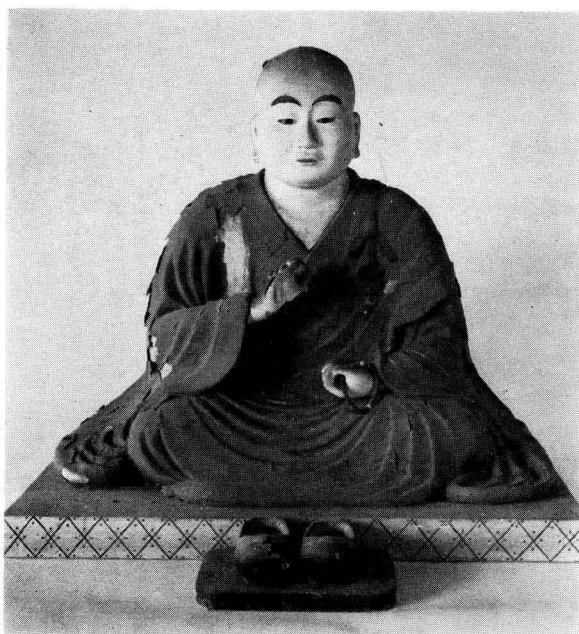
この外高養寺には像高18.5cm、六臂の木造愛染明王坐像がまつられているが、この像も造立年代は古くない。



高養寺 木造不動明王立像及び二童子立像



同 銘



高養寺
木造弘法大師坐像

古文書

貫達人

正覚寺文書.....	46
海前寺文書.....	55
小坪寺文書.....	62
仏乗院文書.....	71

正覚寺文書目録

番号	文書名	年月日	形数 態量	備考
1	正覚寺書上帳	寛政9・7	1冊	明治の追記あり
2	正覚寺過去帳	年月日未詳	1冊	表紙欠
3	正覚寺過去帳	年月日未詳	1冊	

○正覚寺書上帳

(表紙)

「寛政九巳年七月

南無阿弥陀仏 千誉(花押)

当寺十四世

千誉岸応代改之」

(ママ)
什物記 御縄文録三年年中嶋大蔵様也

一下畑三畝貳拾八歩 寺ノ上此高一斗五舛七合三尺

一下々畑一畝拾歩 ヤクラロ 此高三舛九合九尺

高合一斗九舛七合貳夕 此畝歩五畝八歩也

右高外ニ寺屋シキ五畝拾歩 御除地

右之通相違無御座

延享四卯三月 一誉代改

一客殿建立 報誉代

庫裡建立覚

一金子貳分貳朱也 施主 住吉長右エ門

正覚寿覺之墓木売私イ依之理誉常智 常覚妙智先祖精霊
廻向可有者也 延享四卯十一月 一誉代

一金一分也 享保四卯十二月廿三日 施主江ノ坂下
為覚ヨ妙正信女菩提也 上田十兵衛
廻向可有者也

一金貳両 右者当邑勘兵エ子孫断絶ニ付屋シキ売私先祖月牌ニ付ル者也
世話人 六良兵エ 惣左エ門 此金内一両庫裡ノカヤノ代巻向三蔵ノ畑ニ入

清覚妙順信女 珠永信士 十善念心信士 夏屋貞讃信士 本覚還貞信士
秋富信士 教山信士 嘆覚妙讃信女 一家先祖代々右廻向可有者也 一誉代
右之金子并フシ人歩種方ニ而建立仕候

一誉代

一鎮守 住吉大明神選宮 延享五戌辰正月十一日 一誉代

一雙番建立之施主己午兩年和讃ニ而盆中近里近郷勧進仕出来申候人数左之通 一誉代

世話人 平治良 八三良 庄五良 五平治 万右エ門 弥平治
金 八 源 八 定 助 善四郎 勘 三 郎 重兵エ

一仏間カフシ 寛延三 庚午八月日

一營代出来

一石坂建立和讃人歩 音頭半治良 八兵エ娘ヲスエ ヲトハ市之助 金八 小坪重五良
六良兵エ娘ヲサヨ ヲキ ヲイヨ 六治良 源八 〆拾貳人

(上良右エ門 又エ門 惣兵エ 与右エ門 弥三八 權作乗子四人
清三郎 次良右エ門 五良助 三左エ門 金八 〆拾三人

(文七 權三良 庄五良 八五良 勘三良 〆十人
小平 源次良 五平治 八三良 源八

(弥平治 安左エ門 金八 善太良 長右エ門 源次良 〆拾貳人
源四良 庄五良 三右エ門 係右エ門 庄左エ門 源八

寛延四 辛未 年 一營代 和田邑勅化治右エ門 先達ニ面
住吉長右エ門 七話新バ六左エ門
二日勅化ニ被參候 宝營道林

一底普請

一營代

一天井建立

一營代

一当寺ハ 然阿良忠上人旧跡 タルニ 依而、木山御一代興營正含大和尚様依テ 尊意ニ
御影像建立仕候、

奉 加

一營代

一白銀三枚 正含大和尚様 御寄進御役者中帳場其外御隨
仲手手院 蓮東院 金百疋宛
近末中浦賀御末山近邑之名主檀方邑内百姓

一庫裡二間半五間 右者竜天和尚隠察ニ御座候廻修覆ヲ加江立直シ申候

一本堂屋根替勅化 檀方和讃講中

戒營代

飯嶋邑住吉大明神ハ 古来ハ 相州相鎮守也、然ル (經) 所称失コト其歳不知

(ママ) 文録三午年中嶋大藏様飯嶋相鎮守ト 被仰渡候、右又名主十良右エ門

水帳有之候、右又 報營代

其外諸什物別帳有之候

一石坂建立寛政九巳年出来、一營代建立之処大破ニ 付再建、

右者近里近郷勅化仕和讃人歩、

先達 新場六左エ門并ヲサナ邑六郎兵エ同係ヲリヨ 喜八娘 源助作
ヲタミ 亀藏
小坪谷佐五右エ門 同谷文治郎 同浜伝藏 幸助九郎兵エ 同娘ヲサハ 治郎作娘ヲヨシ
山郎兵エ娘ヲタミ

岸応代

(一)

□本堂再建 寛政十一未年

岸応代

耕營上人代新什物左之通

坐像阿弥陀如来 妙營定月大僧正御真筆

一幅

三尊来迎仏 恵心僧都御筆

一幅

円光大師画像

一幅

観音堂

再建立

井戸一ヶ所

同

金拾兩也 為修覆金也

寄附也

金五両也	為耕耨施餼鬼料、世話人笠間武兵衛、	同
赤地緞子七条一肩		同
善導 九祖 兩大師御影像新建		即營代
鎮守住吉大明神		再建
一鑿		二拾世主 入營代
弘化三年正月廿日求之	施主当所	同
右施主面々 為先祖菩提之可有回向者也	高橋六良兵衛 同 北邑半七 同 与惣右衛門	河内屋吉兵衛 同 酒屋六右エ門妻 ソノ

一金拾四円也	当所披露 施主 高橋安行
右者為本堂修覆料寄附候也	
明治二十一年六月	二拾三世現住 松西順營代
一金五円也	横浜福富町 施主 山下良五郎
右者為本堂修覆料寄附候也	

明治廿年八月	二拾三世現住 松	(西順營代カ)
--------	-------------	---------

○正覚寺過去帳（その1）
（表紙）欠

過現名帳序

仰惟己々実体之時不受一」塵仏仏化用之日何不摂万」法倩案十二縁起之鱗次自」□□果千差而自□□」
□□万別也雖然依他□□」直出生死以彼功德蓋得菩提」看々真如非自非他而包自他」性今無名字之上書表
名号毎」日誦經念仏上報仏祖之恩德」下吊迷情之輪環耳

南無釈迦牟尼如来

南無文殊菩薩

南無普賢菩薩

南無十方恒沙証誠諸仏

(南無)
□□南方阿弥陀如来

(南無)
□□觀世音菩薩

南無大勢至菩薩

南無極樂界会聖衆

南無大小乘新旧翻訳三藏

南無三国伝来諸大祖師等

馬鳴菩薩 龍樹菩薩 天親菩薩

流支三藏 曇鸞大師 道綽禪師

善導大師 円光大師 弁阿上人

記主禪師

梵天帝釈諸天善神

日本大小神祇別住吉三座大神

天神七代地神五代帝王代々

將軍代々

□□他人五穀成就宝祚延長万民□□

□方火德星君神

今上皇帝聖寿万安

大檀那本命元辰

為三界六道闘争戦場亡魂及諸人天人民蠕動之類
禽獸竜蛇魚貝虫芥蒙解説也

本尊阿弥陀如来尾州民部卿御所持也

当寺入仏 享保二十年乙卯五月七日
凜霜院殿幻誓知光赫然大童女 享保二十年卯十月八日

円徳院殿俊誓覚法了性大童女 元文二巳年十二月廿五日

秋感院殿露月珠光大童女 七月十二日

右為御供料金子拾兩御寄付、向後通経念仏不可有懈怠者也、
享保二十一年丙辰四月日

報 誓 代

願主 願誓浄誓信士 寛保三戌午十一月十九日

如来前御三牌位納、当寺齋願者当村高橋氏於江府
令假宅、報誓トハ竹馬契不淺、依之求深縁尾州御朱殿ニ出
入故云云、俗名江戸高橋清石衛門

(中略)

(開山)

□□然阿良忠上人記主禪師

(中)

□興後開山本山第十八世真蓮社快誓上人天文十年三月
十四日起立

初ニ号シ悟真寺ト、後ニ号ス正覺寺ト、然ル面七杉小田原城主
氏重、責ル三浦道十ヲ
依去破却シ悟真寺ヲ、於テ此所ニ櫛ヘ出張ヲ、雖トモ防ギ戦ト、終ニ
損イ食ケ、荒次郎佐吉ノ威ニ
於テ自害ス、故ニ歴代ノ祖不知、寺家記録忘失ス、

三世 聖蓮社円誓上人 寛永三九月二日

四世 欣蓮社心誓上人 寛永十戌正月二十六日
四十五才寂

五世 運蓮社行誓榮公和尚 十一日

六世 欣蓮社厭誓上人及可和尚寛文七未二月二十三日
心誓ノ弟子也 六十八寂

七世 大蓮社広譽上人達道和尚

八世 大蓮社広譽上人存茂和尚元禄十三辰十二月十八日

九世 相蓮社好譽柳茂和尚元禄三年十一月十九日

寛延二年己十二月十九日

十世 身蓮社報譽上人檀靈和尚師ノ遺言故加一ノ世也
在任五十二年

十一世 音蓮社一譽上人演説和尚宝暦十辰年十一月十三日

十二世 香蓮社戒譽上人秀全和尚安永三年三月廿九日

十三世 明蓮社鏡譽上人大円和尚天明三卯三月〇〇

(十四世)

〇〇〇 大蓮社千譽上人岸応和尚〇〇

(十五世)

〇〇〇 舜蓮社耕譽上人専阿幽遂玄了和尚(文化九年)
二月廿〇

十六世 即譽上人 元超和尚文化十一甲戌年四月
豆州稲取正宗寺後転

十七世 神蓮社力譽普照演流和尚文化十四年
丑十月十六日

十八世 冠蓮社頂譽上人住阿寂音宜山和尚文政六本年
七月十二日

十九世 清蓮社肅譽上人敬阿玄応専周和尚浄楽寺江転住

廿世 実玄上人 宗門寺江転住

廿一世 誠蓮社諦譽鑑了善念和尚天保六本年
六月初三日

廿二世 願蓮社入譽上人法性界阿欽哲大巖和尚明治六癸酉年
六月四日

廿三世 得蓮社方譽上人順阿智恵光弁榮老和尚法幢寺=薨ル
明治廿一年
八月十二日

廿四世 転蓮社順譽上人松西方阿卓天和和尚明治廿三年
七月十六日

廿五世 信蓮社幽譽上人深阿溪雲玄龍和尚

右上人ハ三重県津市寺町天然寺ニ住職タルコト廿五ケ年而メ明治九年総本山

知恩院願譽上人御代該山ノ大改革ヲ主唱シ初テ末山大会議ヲ起シ各国

總代ノ投撰ニ因リ事務長ニ當撰シ執事ヲ兼ネ首尾拾貳ケ年間奉職シ而

テ明治廿年之ヲ辞シ故山ニ引キ地方ノ教会部ト一般ノ内事ヲ補育シ明治廿七

年生年六十一ニシテ當寺ニ隠遁ス、之ニ因テ表面住職ヲ任命セスンテ本務ヲ尽ス、

上人職務中参内三回ニ及ヒ

三ツ組木盃等モ拝受セリ、

尤教部省ニ於テ教職管理ノ時

少教正ニ補シ准奏任ノ資格ヲ有ス、

廿六世 原道和尚

廿七世 漸蓮社東譽上人法阿仏真宏源和尚

(後略)

○正覚寺過去帳 (その2)

(表紙)

(去 帳)
「過 〇 〇」

(前略)

良忠院
住吉山悟真寺 快譽上人御代ヨリ
住吉山悟真院正覺寺ト云也

開山然阿良忠勅謚記主禪師大和尚

本山天照山第十八世
中興 真蓮社快譽上人大和尚
天文十年三月十四日起立 当寺号改正覺寺
天文十五年二月三日示寂 称後開山

第三世聖蓮社円譽上人大和尚
寛永三寅年九月二日寂

第四世 中興 欣蓮社心譽上人大和尚
寛永十四年正月廿六日滅 四十五歳

第五世 運蓮社行譽繁公和尚
十一日

心譽之弟子也
六世 欣蓮社厭譽上人及可和尚 寛文七未年
二月廿三日

七世 大蓮社広譽上人達道和尚

八世 大蓮社広譽上人存茂和尚 元禄十三辰年
十二月十六日

九世 相蓮社好譽柳茂和尚 元禄三年
十二月十九日
師ノ遺言故加二世也 在住五十三年

十世 身蓮社報譽上人檀靈和尚 寛延二年
十二月十九日

十一世 音蓮社一譽上人演説和尚 宝暦十辰年
十一月十三日

十二世 香蓮社戒譽上人秀全和尚 安永三年
三月廿九日

十三世 明蓮社鏡譽上人大円和尚 天明三年
三月十九日

十四世 大蓮社千譽上人岸応和尚

十五世 舜蓮社耕譽上人 尊阿 幽遂 玄了和尚 文化九申年
二月廿一日

十六世 即譽上人元超和尚 文化十戌年四月
豆州福取正宗寺江転住

十七世 神蓮社力譽普照演流和尚 文化十四年丑
十月十六日

十八世 冠蓮社頂譽上人 住阿 寂音 宜山和尚 文政六未年
七月十二日

十九世 肅譽上人専周和尚 浄楽寺江転住
後西徳寺ニテ終焉

廿世 実玄上人 宗門寺江転住

廿一世 誠蓮社諦譽鑑了和尚 天保六未年
六月三日

廿二世 願蓮社入譽上人 法性 界阿 歆哲和尚 明治癸酉年
六月四日

廿三世 得蓮社才譽上人順阿智慧光弁栄
明治十二年七月本山内幹事
中譽上人持命ヲ以住職
一葛次へ復席法轉寺住
職中成功ヲ賞シテ金蘭衣賜 補任権中講義候

廿四世 転蓮社順譽上人^{松西}阿卓^明天和^治和尚^{廿三年七月十六日}

山口県出生 明治十七年 本県鎌倉延命寺ヨリ
転居、看主 明治廿年十月 住職任命相成候、

廿五世 信蓮社幽譽上人深阿溪雲玄龍老和尚

上人ハ尾陽丹羽郡馬見塚ノ庄日置儀右衛門氏ノ二男也
勢陽安濃郡津市寺町天然寺ニ住スル事廿五ケ年、而ゾ

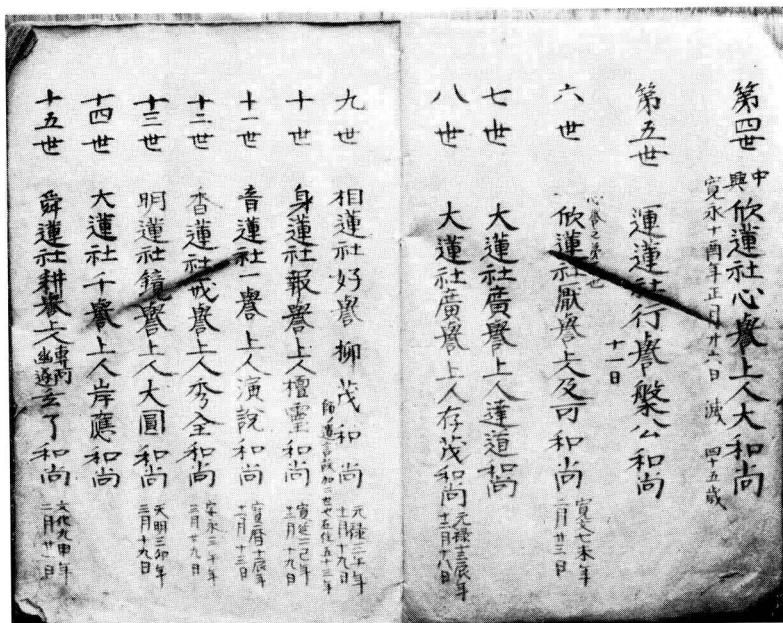
上人ハ我カ総本山智恩院維新后大ニ衰廃シ諸伽藍大
破ヲ告ケンモ誰有テ之ヲ保修スル者曾テナシ、于時明治九年

八月自ラ登山シ門主順譽徹定大教正ニ謁シ之カ法方ヲ議
奏シ直ニ智恩院事務長ニ任セラレ首尾十二ケ年間任務ヲ遂ケ

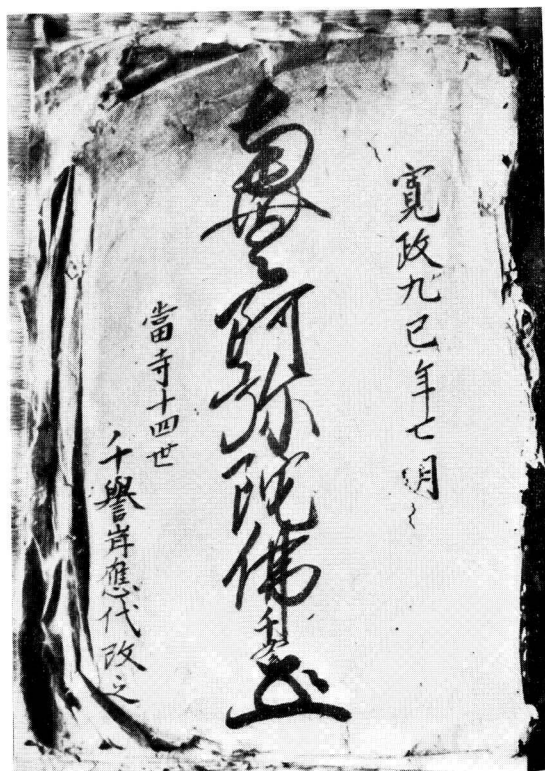
明治廿年職ヲ辞シ天然寺ヘ歸省シ廿七年一月六十一歳ニシテ
隠遁シ、則当寺ヘ廿七年四月廿日止錫ス、

右総本山事務奉職中前后三回参内、天顔拝謁ス、

(後略)



正覚寺過去帳



正覚寺 書上帳 (表紙)

海前寺文書目録

番号	文書名	年月日	形態 数量	備考
1	海前寺過去帳	文化13・7	1冊	
2	海前寺過去帳	嘉永5・7	1冊	
3	海前寺過去帳	明治～昭和年間	1冊	

○海前寺過去帳（その1）

（末尾）

打金奇附施主

高橋金兵衛

安田利右衛門

同 太兵衛

同 八郎右衛門

丙申 天保七三月日

当山三十七世 浄元代

奇附

（向拝）

御輩口障子 貳本

内障子 四本

乙未 天保六二月日

願阿浄元

本尊彩色 施主 檀方中

当山卅六代之叱

奇附 施主 高橋重吉

同

奈須野五兵衛

当山卅六代之叱

南方火徳星君神

今上皇帝聖寿万安

大檀那本命元辰星

文化十三年七月 改元 供養山三宝院海前寺

(ママ)
卅五代 鸕山拜□

覚

木引施主

吉銅四拾疋 太 兵 衛

同 貳拾疋 同
利 右 衛 門

同 貳拾疋 同
八 郎 右 衛 門

同 貳拾疋 同
五 兵 衛

同 貳拾疋 イセ丁
伝 八

同 三拾疋 きイもく座
兵 吉

同 三拾疋 当所
長 三 郎

同 拾疋 山井嶋
権 太 郎

同 拾疋 同
所 て ん 屋

各先祖代々菩提為

天保十亥七月吉日

石笏暮田

安阿

○海前寺過去帳（その2）

（表紙）

「 供養山
過 去 帳
海前寺 」

序

夫避苦求楽実含識之常情、厭濁欣浄是生灵之
素志但行有美惡土成妙穢娑婆五濁山積惡現
安養七珍因習善而蔽也、恭以三界有情四生群
類転変無窮生死出離無期故求願法界衆
生断除三障同得往生等爰当寺檀越先亡

後滅之灵魂列此名簿而日時勤行所修功薰
以仏祖哀愍而至同生安養速証覺果者為仏
恩之一助 云爾

維時

嘉永五^{壬子}年

七月仏歡喜日

三十八主 惠讓代

供養山海前寺三^(ママ)宝院曆代

当山開山巖阿上人

永和二年
八月八日

二代

三代

四代

五代

六代

七代

八代

九代（編者註 十九代まで無記）

二十代 東院但阿上人音阿和尚 十二日

二十一代 東院但阿上人^{門宗}宗門和尚 元禄二^己巳年
九月三十日

二十二代 見蓮社面譽証阿存了和尚 元禄十三^辰年
九月六日

二十三代 東陽院但阿上人原理和尚 元禄十六^年
二月廿日

二十四代 興徳院覺阿上人天意和尚 廿二日

二十五代 興徳院覺阿上人性全和尚 享保九^辰年
六月十七日

二十六代 東陽院但阿上人堯弁和尚 元文五^申年
五月朔日

二十七代 一向寺真阿上人 宝暦五^亥年
七月十三日

二十八代

二十九代 桂光院其阿上人俊良和尚 明和六^丑年
四月

三十代 東陽院但阿上人台元和和尚 天明四^辰年
十一月廿五日

三十一代 東陽院但阿寛静和尚

三十二代 東陽院但阿上人蘭山和尚 文政元^寅年
五月廿五日

三十三代 常住庵相阿鸞山和尚 文政七^申年
五月廿五日

- 三十四代 東陽院但阿上人弁栄和尚 文政十亥年
三月十八日
- 三十五代 東陽院但阿一静和尚 天保五年年
三月廿二日
- 三十六代 ^{等 庵}東覚院相阿興善和尚 天保六未年
参月廿六日
" "
- 三十七代 ^等東覚庵願阿浄元和尚 天保九戌年
四月廿五日
"
- 三十八代 東陽院但阿恵譲和尚 安政元寅七月十五日寂
甲州当西念寺ヨリ移転
- 三十九代 万生軒専阿灌隆大徳 尾島宮内福寺資藤嶺ヨリ住職、安政元寅八月入院、
安政四巳十月常陸奥原願名寺江転住、
- 四十代 東陽院但阿権少講観心和尚 於藤嶺真浄院明治十五年四月廿日示寂
元治二乙丑二月隠居
- 四十一代 桂光院其阿上人鏡純和尚 大正九年九月一日
在住四十八年七十八才入寂
- 四十二代 藤岡順善和尚 大正十年ヨリ住命ヲ拝シテ
ヨリ大正十三年三月マデ在住
乱橋向福寺へ転住
- 四十三代
(中略)
(末尾)

施主 高橋金兵エ

- 一打金 壺 安田利右エ門
- 一鏡 壺 同 太兵エ
- 一鉢 壺 同 八良右エ門

右<sup>天保七申
三月日</sup>三十七代願阿浄元代寄附之

- 一向拝口障子二本 浄元代寄附之
- 一本尊彩色 浄元代 檀方中
- 一松苗千本 高橋金兵衛 寄附之
奈須野五兵衛
- 一前机老脚 恵譲代 幸七寄附之
- 一本堂表通りマイラ戸六本 恵譲代建立
- (陣)
一本堂下陳内陳板之間張替 恵譲代建立
- 一庫裏<sup>四間半
三間</sup>再建<sup>金四十卷向
錢八貫四百文</sup>

右三十八世恵譲代建立之

一来迎仏老幅

一座敷襖四本 安政二卯五月 施主 飯島忠右エ門

右三十九世灌隆代新調之

夫当山之義、文久二^{壬戌}年冬十二月十七日夜、遂々

本堂庫裏共焼失イタシ、残処鐘楼^{而已}無餘儀

翌年報身院観音堂貰請為仮堂本尊安置

為後年印置者也、且此過現名帳去辰八月廿五日夜

大風雨之節及破壊難捨置候ニ附結之者也、

維時 慶応元^{乙丑}夏閏五月再改之

一金拾九円貳分也 是ハ 明治八年十二月中畑五ヶ所請戻シ代金ナリ、但出金等
委ッハ別帳ニ譲ル、尙当寺永統資本ナル故是ニ記、

本尊二大士御彩色 明治五^酉年十二月十七日 檀方中納金 鏡純代

宗祖上人木像壹軀 同年同月 右 同

本尊前釣灯籠壹対 同年同月 右 同

本尊前五具足新調 明治十五^年十一月十七日

内香炉 為 施主 長沼久右エ門夫婦

内燭台 為 施主 安田利右エ門

内燭台 為 先祖曆代々諸精霊 施主 奈須野五兵衛

内花立 為 各々先祖代々精霊 施主 鹿嶋徳兵衛
二科孫兵衛
岡村吉良兵衛

内花立 為 各々先祖代々精霊 施主 安田久作
同 忠右エ門
同 佐次兵衛

永代施餓鬼料

一金参拾円也 大正九年^{三月}納 東京市 安田政吉

明治貳拾八年家根葺替ノ際其資金ナキ為メ全年三月廿日当寺「世話人安田利右エ門ヨリ金参拾五円借用シテ葺上終了」シタルモノナリ、然ルニ大正九年九月一日鏡純和尚遷化葬式后、全「年」全月四日ヲ以テ世話人ノ協議上前記ノ永代施餓鬼料ヲ合シテ「悉皆返済候事、

奈須竹次郎

安田勝五郎

安田伝蔵

○海前寺過去帳（明治～昭和より抜萃）

（前略）

（明治四十一年）

申年十二月廿六日仲里町報身院、香蔵寺焼亡ス、

明治四十四年四月全上二ヶ寺合併、小坪寺ト改称入仏式アリ、（中略）

（明治四十二年）

当^西十一^代 桂光院其阿上人鏡純和尚 九月一日寂、乱橋向福寺ヲ兼務ス、（中略）

大正稱名寺 三十四代 中僧正執啓堂法阿上人足下唯然老和尚 二月八日午後四時十四分遷化、当住近然師僧、（中略）

（昭和四年）

尊二行 六十五世 他阿上人尊光大和尚 十月廿八日遷化 （下略）

小坪寺文書目録

番号	文 書 名	年 月 日	形 態 数 量	備 考
1	小坪寺過去帳	嘉永1～昭和20	1 冊	
2	香蔵寺過去帳	天保8・4	1 冊	表紙ニ『香蔵寺』トアリ
3	香蔵寺過去帳	安政2・6	1 冊	
4	香蔵寺内過去帳	安政4・5	1 冊	表紙ニ『香蔵寺 巻 旭照山』内過去帳「香蔵寺」トアリ
5	香蔵寺過去帳	年月日未詳	1 冊	表紙ニ『香蔵寺式』過去帳「香蔵寺端替代」トアリ
6	香蔵寺過去帳	明治23・8	1 冊	表紙ニ『明治廿三年八月改整「香蔵寺参」新亡簿巻」旭照山卅八世』端替代』トアリ
7	報身院霊名簿 上	寛永10～宝暦5	1 冊	
8	報身院霊名簿 中	宝暦6～天保1	1 冊	
9	報身院霊名簿 下	天保2～	1 冊	
10	報身院過去帳	慶応3・2	1 冊	
11	報身院霊名簿	明治17・11～	1 冊	表紙ニ『報身院 巻 霊名簿』明治十七十一月ヨリ；全』トアリ
12	報身院軒別過去帳	年月日未詳	1 冊	表紙ニ『過去帳軒別（報身院）』トアリ

○香蔵寺過去帳（その1）

（表紙）

外題ナン

（見返）

（朱印）

☐ 南無大悲観世音菩薩

南 無 阿 弥 陀 仏

南無得大勢至菩薩

卅九世 貞隆拝書 印

過去帳并序

夫以三界六道昇沈不定也四生五受
 苦楽万品也生々世々恩所誰親孰疎
 衆不弁也可悲々々爰仏子 某申 幸来人
 道喜入桑門智恩報恩自利々他今正
 是時也依之以所修功黨先報仏祖恩
 德次吊前後亡魂願名帳一紙輩為安
 養一蓮友乃至徧法界風弘有頂無間
 塵埃利衆生雨灑鉄圍沙界乾仍吊先

亡湫滅過現名帳序 云爾（中略）

（卷末）

寛正五甲申七月六日

当寺開山人璠譽存公大徳

十九世

昭蓮社光譽上人

元和七酉二月十四日

廿世

光蓮社雲譽上人

寛永九申七月十五日

廿一世

信蓮社城譽祖覚

年月月不知十日

廿二世

然蓮社廓譽上人満悦和尚

寛文八戌申十二月三日

廿三世

静蓮社寂譽上人白心和尚

延宝五巳三月十一日

廿四世

生蓮社願譽上人存哲和尚

延宝八申五月十九日

廿五世

超蓮社建譽上人残翁和尚

天和三亥五月六日

廿六世 当山中興開山

行蓮社長譽上人満慶和尚

享保十八丑九月七日

廿七世

喚蓮社遣譽上人秀山和尚

宝永四亥三月五日

廿八

善蓮社万譽上人繫靈和尚

元文四未十月廿六日

廿九世

常連社廓譽上人円流和尚

宝暦三酉六月十五日

卅世

住蓮社還譽上人徳阿天随

文化十一酉九月十七日

卅一世

建蓮社立譽常阿無哀然長

享和三亥九月

卅二世

演蓮社宣譽上人恵暢和尚

文化七三月佐崎へ転住

卅三世

宝蓮社宗譽上人隆成和尚

文政十三寅閏三月十五日

卅四世

臣蓮社忠譽上人礼阿義道純孝

嘉永五子正月八日

卅五世

勇蓮社弘譽大念和尚

天保八酉正月十五日

卅六世

正蓮社端譽心全和尚

当寺之義往古寛正年中ニ致焼失、

過去帳并開基年代不相知、開基

後中興開山ヲ璠譽存好ト申候、

本尊延命地藏菩薩、運慶之作、

立像弥陀如来定澄之作、中尊

十一面観音老鉢、鎌倉札所第

七番目弁才天如并十五童子

貴船明神像

春日大明神像

依之天保八西四月改之

三十六世 端誉代

卅九世

篤蓮社肇誉上人功阿敷広梅山領貞隆

明治十三年十二月十三日任職ス、生国石川県金沢市如来寺縁ヨ学隆徒弟、

○香蔵寺過去帳（その2）

（表紙）

外題・題箋等ナシ

過去帳 并 序

夫以三界六道昇沈不定也、四
生五受苦楽万品也、生々世々
恩所誰親孰疎衆不弁也、可悲
々々、爰仏子 某甲 幸来人道喜入
桑門智恩報恩自利々他今正
是時也、依之以所修功薰先報
仏祖恩德、次吊前後亡魂願名
帳一紙輩為安養一蓮友乃至
徧法界風弘有頂無間鹿埃、利
衆生雨灑鉄圍沙界乾仍吊先
亡後滅過現名帳序、

南無遣教主釈迦牟尼如来

南無来迎願主阿弥陀如来

南無六方恒沙証誠諸仏

南無西方大悲観世音菩薩

南無西方大勢至菩薩

南無西方清浄大海衆

南無浄土三国伝灯祖師

浄土三部妙典

馬鳴菩薩	龍樹菩薩
天親菩薩	流支三藏
曇鸞大師	道綽禪師
善導大師	円光大師
記主禪師	寂慧上人
聖光上人 老	観誉上人

当寺開山ヨリ五代之間年号月不相知、御命日之儀ハ」古来写置、

当寺世代

開山	旭蓮社照誉上人		年号相不知 遷化之六日
二世	海蓮社願誉上人		年月不相知 遷化之月十一日
三世	深蓮社広誉上人		年号月不知 遷化之月廿三日
四世	皆蓮社到誉上人		年号月不知
五世	最蓮社勝誉上人		年号月不知 遷化之月十四日
六世	中興 開山 妙蓮社珎誉上人	存公大徳	寛正五甲申 七月六日
七世	厳蓮社浄誉上人	賢定和尚	文明十己亥 六月十三日
八世	宝蓮社香誉上人	祐仙和尚	長享元丁未 十二月廿一日
九世	歆蓮社喜誉上人	信翁和尚	明応五丙辰 四月三日
十世	養蓮社供誉上人		年号月不知 遷化之月廿四日
十一世	梵蓮社声誉上人	開隆和尚	永正十甲戌 八月廿八日
十二世	威蓮社然誉在天和尚		大永七丁亥 正月廿三日
十三世	本蓮社善誉上人	大説和尚	天文八己亥 十一月七日
十四世	音蓮社暢誉上人	宣界和尚	天文廿一壬子 六月十日
十五世	得蓮社聞誉上人	沢巖和尚	弘治三丁巳 五月廿五日
十六世	信蓮社自誉上人		天正二甲戌 三月十九日
十七世	真蓮社成誉上人	円旭和尚	文祿二癸巳 閏五月十四日
十八世	伝蓮社普誉上人	成禪和尚	慶長十九甲寅 五月十六日
十九世	照蓮社光誉和尚		元和七辛酉 二月十四日
廿世	光蓮社雲誉上人大和尚		寛永九壬申 七月十五日

廿一世	信蓮社城營祖覺和尚		年号月不知 十日
廿二世	然蓮社廓營上人	滿悅和尚	寛文八戊申 十二月三日
廿三世	静蓮社寂營上人	白応和尚	延宝五丁巳 三月十一日
廿四世	生蓮社願營上人	存哲和尚	延宝八庚申 五月十九日
廿五世	超蓮社建營上人	殘翁和尚	天和三癸亥 五月六日
廿六世	中興 ^(ママ) 開山 行蓮長營上人	滿慶和尚	享保十八癸丑 九月七日
廿七世	喚蓮社遣營上人	秀山和尚	宝永四丁亥 三月五日
廿八世	善蓮社万營上人	繁靈和尚	元文四己未 十月廿六日
廿九世	常蓮社廓營上人	円流和尚	宝曆三癸酉 六月十五日
三十世	住蓮社還營上人	天随和尚	文化十癸酉 九月十七日
三十一世	建蓮社立營然長上人和尚		享和三癸亥 九月二日
三十二世	演蓮社宣營上人	惠暢和尚	文化七三丙子 佐嶋村福本寺へ転住仕 其後福本出
三十三世	宝蓮社宗營上人	隆成和尚	文政十三庚寅 閏三月十五日
三十四世	臣蓮社忠營上人	純孝和尚	嘉永五子三浦林正慶 院ニ而正月八日ニ死終
三十五世	勇蓮社弘營誓道大念和尚		天保八丁酉 正月十五日
三十六世	正蓮社端營上人心全和尚		明治三十三年子十一月十九日寂、本山一護行年九拾才、 紀州産、明治二巳年四月 廿六日材木座九品寺江転住、
三十七世	法蓮社随營上人沼阿歆喜真了和尚		東京本所産、明治二巳年 五月十三日天照山学頭ヨリ兼住職
三十八世	定蓮社進營上人徳円和尚		明治十一年九月住 同十一年十一月転住
三十九世	薦蓮社肇營上人功阿勲広梅嶺貞隆和尚		明治十三年十二月着住、同十九年 九月本住、鹿石川縣金沢区小立野 如来寺綜營上人弟子、 明治四十一年三月十七日埼玉縣西新井西教院へ転住ス
四十世	通蓮社善營一心専阿行念上人		明治四十一年七月廿一日兼務任命ス 小坪寺中興第一世也

(卷末)

当寺之義往古寛正年中ニ致焼失、

過去帳并開基年代不相知、開基

後人王百三代後花園院御宇寛正

五甲申年、六代目中興開山ヲ玆營

存公天節ト申候、貞享四丁卯年迄

二百廿四年ニ相成申候、後代書替之時年

号御付被成候、

当寺阿弥陀如来ハ定朝之御作也、

人王六十八代後一條院御宇依仏工妙任法橋、
本尊延命地藏菩薩 運慶之作

○十一面觀世音菩薩 但シ作者不相知中

鎌倉札所第七番目也 かうぞうし仏のちかひありかたや
むねのはちすあらはれにけり

○弁財天女并十五童子 但シ作者不相知申

○千手觀音菩薩 壱鉢

○貴船明神像 壱鉢

○春日大明神像 壱鉢

当寺本堂之裏岩穴 = 貴船大明神之石塔

有之、石ノ表貞和二 丙戌 年十一月日有之候、

安政二 乙卯 年迄五百十年 = 相成申候、後代

為御心得印置、

○印ナシ

依之安政二 卯 六月日改之

旭照山阿弥陀院香藏寺 三拾六世

端 誉 代 印

心全弟子

心達写之畢 行年十三才

○報身院過去帳

(表紙)

「報 身 院」

過去帳序

夫避苦求楽実含識之常情厭濁
欣浄是精霊之素志但行者美惡
土成妙穢娑婆五濁由積惡現安
養七珍因習善而蔽也恭以三界
有情四生群類轉變無窮生死出
離無期故求願法界衆生断除三
障同得往生等爰当寺檀越先亡
後滅之靈魂列此名簿而日時勤
行所修功薰以仏哀愍而至同生
安養速証覺果者為仏恩之一助 爾云

于時 慶応三 丁卯 二月 十六世 寛譽代
為響譽得生廓音信女菩提 施主 山田清七

当寺歴代

開山信蓮社深譽上人	中興迄之間 一向不知	文明五癸巳年 七月十五日
中興願蓮社行譽龍公上人		寛文四甲辰年 五月二十日
二世行蓮社願譽龍天上人		寛文六丙午年 九月十九日
三世雲蓮社正譽覺音上人		寛文七丁未年 十一月七日
四世信蓮社単譽満貞上人		寛文九己酉年 八月四日
五世経蓮社讃譽含受上人		延宝三乙卯年 十一月十日
六世成蓮社弁譽団の上人		元禄十六癸未年 十一月十五日
七世見蓮社徹譽円の上人		享保九甲辰年 二月九日
八世便蓮社搜譽体玄上人		享保十六辛亥年 四月二十八日
九世本蓮社誓譽察州上人		明和八辛卯年 六月七日
十世法蓮社震譽祐岸上人		転住
十一世深蓮社高譽勇哲上人		天明四甲辰年 三月八日
十二世転蓮社昇譽柳高人		天明六丙午年 十月十五日
十三世大蓮社廓譽然成上人		寛政七乙卯年 八月四日
十四世寛蓮社曠譽祖海上人	転住	天保五甲午年 八月四日
十五世行蓮社篤譽信達上人		天保三壬辰年 十一月十九日
十六世名蓮社寛譽義善上人		明治十二己卯年 三月二十六日
十七世寛蓮社賢譽明善上人		明治十六癸未年 十二月廿四日
十八世徳蓮社充譽円明上人		明治十八年 高座郡石川村 三月十四日住職 日性院徒弟
十九世篤蓮社肇譽貞隆上人		明治廿三年五月三十日任命 全四十二年

○小坪寺過去帳

(表紙)

「過去帳 嘉永元年
昭和二十年」

(序)

自嘉永元年 至明治四十年 香蔵寺分前

自明治六年 至明治四十年 報身院分後

明治四十年以後ハ両寺合併シタルヲ以テ別記セズ（中略）

明治四拾壹年

從是本山管理転法輪行念焼香

明治四拾年拾貳月廿六日夜報身院ヨリ出火、香蔵寺」等全焼シ、僅ニ本尊及過去帳ノミ無事ナルヲ得タリ、大正十二年九月一日大震災ニ「本尊奉出者草柳倉吉破壊セリ光明寺ニテ」右ニ付寺檀協議ノ上本尊ハ一時天照山ニ奉安供」養シ住職野村篤貞隆ハ辞職シ、両寺ヲ合併スルノ「議粗ホ一致シタルヲ以テ以下両寺分合併記入スル支」トシタリ、（中略）

（明治四十一年）

從是善譽行念焼香

七月廿一日大仏殿高德院住職転法輪行念」

報身院香蔵寺兩寺ノ兼務住職ニ任命セラル」（中略）

（明治四十二年）

金蓮社権僧正剛譽上人忍阿不懷心戒珠大和尚 四月十一日 大仏殿十一世（中略）

（明治四十三年）

四月十三日両寺ヲ合併シテ転法輪山二尊教院」小坪寺ト改称ノ件及再建ノ件嚴許（中略）

転運社権僧正法譽上人輪阿無極隆存大和尚 四月廿八日 長谷寺一世（中略）

新檀方ニ付先祖以来ノ戒名ハ養性院正覚寺ニ附テ調ブルヲ要ス」（中略）

（明治四十三年）

清蓮社浄譽上人一行阿無上諦道老和尚 二月十八日 本尊寄附主
芝清光寺一代隆信師（中略）

明治四拾三年五月貳拾四日本尊遷座」式ヲ挙ク」

是ヨリ前全四拾壹年十月再建工事ニ着」手ス、則チ円覚寺中景福菴堂舎ヲ譲リ受ケ、工費金貳千六百円ノ予算ヲ以テ間口拾貳間奥行六間ノ客殿造総瓦葺ノ荳棟落成セリ、本尊ハ破壊甚シキヲ以テ芝清光寺」ヨリノ寄附ニテ奉安セシモノ也、本日天照山主武」田芳淳僧正ヲ大導師ニ天童音楽出勤、

僧五拾餘員ニテ安田綱蔵宅ヨリ練供養ヲナス、」全貳拾五日宗祖円光大師ノ七百年法要举行、練供養前日ノ通りナリ、空也念仏等アリテ頗ル盛大ヲ極ム、本山ヨリ住職ニ中興総」代一同ニ院号授與アリテ其功績ヲ賞セラル、再建工事ハ未ダ完成ニ至ラザルモ八分通り成功」ト云フベシ、総代等一同ノ苦心經營洵ニ不容易」ノ支トス、仍テ茲ニ之ヲ誌シ置ク、中興善譽」弟子行孝書ス、

惜哉、大正十二年九月一日大震災ニ本堂宇全潰」滅亡

（卷末）

「転法輪山二尊教院小坪寺内過去帳

中興第壹世 善譽行念寄附」

南無大悲觀世音菩薩
南無阿彌陀佛

南無得大勢至菩薩

過去帳
夫以三考六道昇沈不定也四生五受
苦樂萬品也生於世々思所誰親孰疎
與下解也可悲々々爰佛子李來人
道喜入桑門智恩報恩自利々他今正
是時也依之以所修功業先報何祖恩
德次吊前後七魂願名攝一紙筆為安
靈一蓮女乃至徧法界風拂看須臾間
塵埃利衆生而混鐵園沙界乾仍吊先
七沒滅過現名帳序 云爾

廿九世 負隆拜書

靜蓮社寂譽上人白應和尚
生蓮社願譽上人存哲和尚
超蓮社建譽上人殘翁和尚
行蓮社長譽上人滿慶和尚
興蓮社遺譽上人秀山和尚
善蓮社萬譽上人聚雲和尚
帝蓮社廓譽上人圓流和尚
住蓮社還譽上人德河天隨
建蓮社立譽常阿畏衰然長
寶蓮社宗譽上人隆成和尚

八 寶蓮社 喬譽上人 祐仙和尚
九 歡蓮社 喜譽上人 信翁和尚
十 養蓮社 供譽上人
十一 梵蓮社 聲譽上人 閻隆和尚
十二 域蓮社 然譽上人 天和和尚
十三 本蓮社 善譽上人 大龍和尚
十四 音蓮社 暢譽上人 宣翠和尚
十五 得蓮社 開譽上人 澤巖和尚
十六 信蓮社 自譽上人
十七 真蓮社 成譽上人 國旭和尚
十八 傳蓮社 普譽上人 成輝和尚
十九 照蓮社 光譽上人 和尙
二十 光蓮社 雲譽上人 大和和尚
二十一 信蓮社 城譽 祖覺 和尙
二十二 然蓮社 廓譽上人 清悅和尚
二十三 靜蓮社 寂譽上人 白應和尚

小坪寺 過去帳 3 種

仏乗院文書目録

番号	文 書 名	年 月 日	形 数	態 量	備 考
1	阿弥陀如来立像胎内文書		3	通	
	○修復記録	宝永 2・6・15	1	通	
	○同	安永 4・7	1	通	
	○同	昭和 7・10・28	1	通	

ナオ、コレラ文書ノ釈文ハ仏乗院彫刻ノ項参照。